



図8 佐紀古墳群(東群)位図(1/25,000)

円筒埴輪は、川西安・幸氏による円筒埴輪の編年(川西1978)の第Ⅲ期(5世紀前半)にあたると考えるが、近年、鐘方正樹氏や小浜成氏により円筒埴輪編年の再検討も行われており(鐘方1997・小浜2003)、その成果によつてもう少し詳しくみておきたい。

法華寺垣内古墳は、所在する位置から考えても佐紀古墳群(東群)を構成する古墳の一つとみてよかろう。この佐紀古墳群から出土している円筒埴輪については鐘方氏による考察があるので、この成果を標へとして比較・検討してみることとする。ただし、氏が示された200mを超える大型前方後円墳から出土した埴輪の編年の基準となる様々な指標を、全長100m程度の古墳から出土した埴輪に用いて単純に比較してよいかという問題はあるかと思われる。しかし、その点に留意しつつも、同じ古墳群内の埴輪ということもあり、時期や地域の点からみてもこれらの埴輪に全くの関連性がないとも思われないので、検討の対象として扱うことは許されると考える。

氏の考察によると、佐紀古墳群(東群)の古墳から出土した円筒埴輪は、コナベ古墳-市庭古墳-ウワナベ古墳-神明野古墳-ヒシアゲ古墳(磐之媛陵古墳)の順に位置づけられる。これらの円筒埴輪にみられる傾向として、時期が下るにつれて突帯間隔および底部高(底面から第一突帯上辺までの高さ)が小さく(低く)なること、また突帯間隔と底部高との間隔についても古い時期の円筒埴輪は底部高が突帯間隔を上回っているが(鐘方分類B類)、時期が新しくなると両者が近い値を示すようになり(同A類)、次第にB類がみられなくなっていくという。また、コナベ古墳、市庭古墳の円筒埴輪には黒斑がみられるが、ウワナベ古墳以降の円筒埴輪には黒斑はみられなくなるようである。

そこで法華寺垣内古墳から出土した円筒埴輪をみると、突帯間隔と底部高の関係については不明であるが、突帯間隔がわかるものは1例だけあり、その数値は11.3cmである。底部高がわかる資料は2点あり、1点が18cm、もう1点が13.9cmである。また、黒斑を有する埴輪片が多くみられる。

以上のような円筒埴輪の特徴から、佐紀古墳群(東群)の円筒埴輪の中に法華寺垣内古墳の円筒埴輪を位置づけようすると、突帯間隔はコナベ古墳が13cm前後、市庭古墳は不明で、ウワナベ古墳は11.5~12cmのものと13.5cmのものとがみられるようである。底部高はコナベ古墳と市庭古墳に14.5cm前後のものと16.5cm前後のものがあり、ウワナベ古墳は12.5~13.0cmのものと16.5cm前後のものがみられる。外面の調整をみても、コナベ古墳の円筒埴輪に比べると、法華寺垣内古墳の円筒埴輪は2次調整のヨコハケが省略されたものが多い印象をうける。また、黒斑の有無の点からはウワナベ古墳の円筒埴輪よりも古い埴輪にみられる特徴をもつてゐるところができる。これらのことから勘案すると、法華寺垣内古墳の円筒埴輪はコナベ古墳とウワナベ古墳の間に位置づけることができると思われる。

蓋形埴輪については、小栗明彦氏による詳細な検討がある(小栗2007)。小栗氏の分類について詳しく述べる紙幅はないが、氏の分類から法華寺垣内古墳出土の蓋形埴輪をみてみると、笠部は中位を突帯により分割し(小栗分類X)、先端は沈線を巡らせており(同L)。布張り表現は外面の摩滅のためわかりにくいか、無文の可能性が高いと思われる(同D)。これらのことからDXL型式にあたると考えられる。立ち飾り部は分類の指標となっている飾り板頂辺や鰐部が出土していないので不明であるが、飾り板の文様は用形文で、中位の横帶が三線帶、上位、下位の横帶が二線帶であることから氏のa 3文様にあたるとみてよかろう。文様や立ち飾りの受け部近くに鰐が付いていない等の部分的な特徴から全形を推定すると、津堂城山古墳(大阪府)から出土した蓋形埴輪に類似するのではないかと思われる。14は同じく用形文であるが、「三線帶や二線帶あるいは単線となった横帶と縦帶が、本來の規則性から逸脱した形で十字に交差する文様である」c 1類にあたる。軸受け部は受け口状である。以上のような文様と立ち飾り部との対応関係から、法華寺垣内古墳出土の蓋形埴輪は、氏の編年の段階設定では2段階もしくは3段階にあてはまると考えられる。これを小浜氏による円筒埴輪編年に対応させると、2段階はⅢ期1段階に、3段階はⅢ期2段階に対応する。小浜氏の

円筒埴輪編年は畿内地域の共通編年を目指し、地域間の併行関係を明らかにしようと試みられたものとみられるが、人和地域のⅢ期1段階の古墳として佐紀石塚山古墳、Ⅲ期2段階の古墳としてコナベ古墳があげられており、これに続くⅣ期1段階ではウナベ古墳があげられていることから、基本的には鐘方氏の編年を踏まえられたものと考えてよかろう。

上に述べてきたことから、法華寺境内古墳出土の埴輪は、コナベ古墳の埴輪より若干下る時期のものとみることができる。古墳の規模も同程度の平塚1号墳（奈良国立文化財研究所 1975）からは有墨斑で、突堤間隔が12cm前後、底部高が14cm前後の類似した特徴をもつ円筒埴輪が出土しており、これと近い時期に位置づけてよいのではないかと考える。

V おわりに

発掘調査で新たに発見された法華寺境内古墳とそこから出土した埴輪について、得られた知見や資料の紹介及び編年の位置づけを行った。佐紀古墳群研究の一助となれば幸いである。

最後に、この法華寺境内古墳に関わる可能性のある資料のことについてふれておわりとしたい。

それは、かつて梅原未治氏によって紹介された法華寺町出土とされる長持形石棺のことである（図9下・梅原1920）。この石棺は、当時、奈良帝室博物館（現奈良國立博物館）にあったが、現在は神奈川県横浜市にある三溪園に所在する。この石棺が出土した詳細な場所はわからないが、梅原氏による石棺の紹介文によると、「大利国添上郡佐保村大字法華寺一條街道（法華寺を距る東方半町許）に於いて発見せるもの」とある。「一條街道」は調査地のすぐ南を東西にはする道路（県道谷田・奈良線）のことであり、「東方半町許」とがあるので約50m程度と考えられ、本調査地と非常に近い場所であることが窺える。この石棺については、近年、土生田純之氏による新たな検討も加えられている（図9上・土生田1987）。発見された石棺は蓋の一部で、長さ80cm以上、幅135cmである。短辺には2つの繩掛突起がある。外面は、梅原氏の実測図によれば綾やかなカーブを描く蒲鉾形である（現在は裏返しで置かれており、外面をみることができない）。内面は2段に割り込まれており、頂部はやや綾やかな台形状を呈している。石材は竜山石とみられている。

この長持形石棺は、その出土地からこれまで平塚古墳やコナベ古墳、ウナベ古墳に用いられていた石棺の可能性が指摘されていた（町田1975、土生田1987）。今回見つかった法華寺境内古墳とは出土地点が近接することに加え、法華寺境内古墳は全長100mを超える規模と推定され、長持形石棺を埋葬施設として用いている古墳の規模からみても過甚ではなく、この長持形石棺が法華寺境内古墳に用いられていたものであった可能性は十分に考えられよう。

平城京北方の佐紀・佐保の地域では、先ほどあげた平塚1・2号墳の他にも、平城宮跡内でみつかった神明野古墳をはじめ、木取山古墳（奈良国立文化財研究所 1982）やヤイ古墳（奈良市教育委員会 2001）など、平城京の造営に伴い削平されたと考えられる古墳が発掘調査で検出されている。今後もこういった古墳がみつかることは十分想定されることであろう（高木2008）。今回の新たに古墳を発見したことにより、佐紀古墳群を考える際にはこういった古墳についても留意する必要があることを再認識させられる。それとともに、平城宮・京の範囲に入る全長が100mを超えるような前方後円墳をはじめとして、数多くの古墳が削られ、失われていることを考えると、なぜそのような場所に都を造らなければならなかったのか、ということを問われているように思われてならない。そして、各地から多くの人々を微発して行われた都の造営がいかに大規模な土木工事であったかが容易に想像され、往時に營んでいたであろう聲音が聞こえてくるようである。

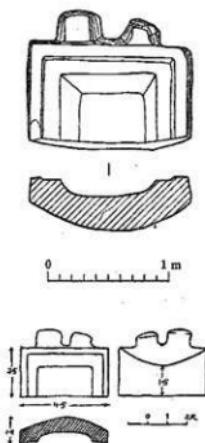


図9 伝法華寺町山上長持形石棺実測図
(土生田1987から転載)

註

- 1) 石材については、京都府立山城郷土資料館橋本清一氏に発掘現場で貯石を実見していただき、ご教示をいただいた。
- 2) 墓丘と周囲の復原図は、本調査での成果をコナベ古墳の遺丘と周囲を縮小してそれにあわせたものであって、概形には異なる点が多くあるものと思われる。
- 3) 調整手法は一瀬 1988による分類を参考にした。
- 4) この他、コナベ古墳、ウリナベ古墳の北方にある航空自衛隊幹部候補生学校の敷地内では、前身の西部国民勤労訓練所の建設時の造成の際に多くの古墳が削平されたようだ。近年の学校校舎の建設工事に先立つ発掘調査により、從来の古墳の分布図（奈良県史跡名勝天然記念物調査委員会 1949）や櫛森図（宮内庁書陵部陵墓調査課 1999）に記されて現在は失われてしまった古墳が検出されている（奈良県立橿原考古学研究所「人和 11～14 号墳」「奈良県遺跡発掘調査 報告 2005 年」他）。

【参考文献】

- ・増和夫 1988 「古市古墳群における大型古墳埴輪集成」『大水川改修にともなう古墳調査概報』V 大阪府教育委員会
- ・柳原末治 1920 「久津川川底研究」
- ・小栗明彦 2007 「藍波埴輪編年論」「埴輪論考 I - 円筒埴輪を読み解く - 」大阪大学人文学博物館報 Vol. 53 櫻 53 櫻 大阪大学人文学博物館
- ・鍛方正樹 1997 「中期古墳の円筒埴輪」「史料大安寺川境内」：奈良市座摩文化財調査研究報告第 1 号 奈良市教育委員会
- ・川西宏泰 1978 「円筒埴輪論義」「考古学雑誌」第 61 卷 2 号
- ・宮内庁書陵部陵墓調査課 1999 「陵墓地形調査成」宮内庁書陵部陵墓調査課編
- ・小嶋 成 2003 「円筒埴輪の觀察視点と調査方法 - 領内円筒埴輪編年表の提示に向けて - 」『埴輪論義』第 4 号 塩臨検討会
- ・齋藤和丸、宇佐晋一 1952 「藍波文の研究（上）」「古代學研究」第 7 号 古代學研究會
- ・高木清生 2008 「佐紀船列古墳群東群の古墳分布復元試案」青谷文庫編「王権と武威と信仰」
- ・土生田義之 1987 「横浜市三渓園所在の石棺」「文化史論叢」（上）横田健一先生古墳紀念会
- ・町田 寧 1975 「古墳」「平城宮発掘調査報告」VI 奈良國立文化財研究所 調査第 23 号 奈良國立文化財研究所
- ・奈良県史跡名勝天然記念物調査委員会 1949 「奈良県史跡名勝天然記念物調査抄録」第 4 号
- ・奈良國立文化財研究所 1975 「平城宮発掘調査報告」VI 奈良國立文化財研究所 調査第 23 号
- ・奈良國立文化財研究所 1982 「平城京左京・条坊二坪・木取山古墳の調査（131-8 次）」「昭和 56 年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報」
- ・奈良市教育委員会 2001 「ヤイ古墳・平城京左京・条坊五坊北郊の調査 第 437 次」「奈良市埋蔵文化財調査概要報告書」平成 11 年度

大安寺旧境内から出土した平安時代以降の軒瓦

原田 勝二郎

I はじめに

大安寺旧境内では昭和 55（1980）年から奈良市教育委員会が継続して調査を進めてきたが、平安時代以降の軒瓦については、その報告が断片的である。一方、近年は平安時代以降、特に中世の軒瓦については、統々と研究成果が蓄積されている。そこで本稿では、大安寺出土の平安時代以降の軒瓦を、瓦当の紋様構成から分類、型式番号を付して紹介し、製作年代を比定してみたい。

II 大安寺旧境内出土の平安時代以降の軒瓦

奈良市教育委員会による平成 12 年度の調査までに出土した平安時代以降の軒瓦は軒丸瓦 320 点、軒平瓦 272 点である。また、奈良市教育委員会以外で調査され、過去に報告されている資料があり、これらは瓦当紋様から軒丸瓦 27 型式 41 種、軒平瓦 32 型式 57 種に分類できる。以下に軒丸瓦、軒平瓦の順に紹介する。

軒丸瓦（図 1～4）

12 型式は逆弁が桜花状の無子葉單弁蓮華紋。A 種がある。紋様は盛り上がりに欠け、平板状である。

13 型式は弁央が葉研状に盛る無子葉單弁蓮華紋。A 種がある。奈良町遺跡の同範品から弁数は 10 弁とわかる。興福寺 VI 丸 D 4、西大寺 57 A も同範の可能性が高い。

15 型式は弁が楕円形の無子葉單弁蓮華紋。A 種がある。中房蓮子が突出する。瓦当下半部側面はヨコケズリ。法隆寺 15 A b は同範であることから 12 弁とわかる。

18 型式は弁が細い单弁蓮華紋で、いわゆる菊花紋である。B 種がある。瓦当外縁は未調整である。

34 型式は内区に宝相花紋を配する。A・B の 2 種がある。A 種は外区内縁に珠紋をめぐらす。薬師寺 86、興福寺 VI 丸 J 1、法成寺例は同範。平等院 NM 043 も同範の可能性が高い。B 種は外区系紋。薬師寺 87、平等院 NM 042、唐招提寺例は同範の可能性が高い。

36 型式は間弁が棍棒状の複弁蓮華紋。A 種がある。法隆寺 36 C b は同範の可能性が高く、本例も 8 弁とおもわれる。外縁は直立縁である。外縁は未調整で懶れ砂が付着する。凸面瓦当付近は粗いタケズリを施す。

39 型式は復古的な紋様構成の複弁蓮華紋。A 種がある。蓮弁は、ほぼ平坦だが、子葉と弁端はやや隆起する。瓦当裏面下部は縱方向のユビナデで調整。薬師寺 39、西大寺 72 A、唐招提寺例は同範の可能性が高い。

41 型式は蓮子が中房中央に無い複弁 6 弁蓮華紋。A

種がある。突出した中房に 4 + 8 の蓮子を配する。

45 型式は外区外側の圓線が無い複弁蓮華紋。A 種がある。間弁は独立せず、つながって蓮弁の周りをめぐる。薬師寺 45、西大寺 74 A は同範の可能性が高い。

46 型式は中房中央の蓮子とその周囲の蓮子との間に圓線をめぐらせる複弁蓮華紋。A 種がある。間弁は圓線に取り付く。法隆寺 50 A は同範の可能性が高い。

51 型式はハート形の子葉をもつ複弁 8 弁蓮華紋。A 種がある。51 A はすでに改範資料があることが指摘されていたが、今回の資料観察で、3 回の彫り直しが確認でき、彫り直し前を A a、彫り直し後の古いものから順に A b・A c・A d とする。51 A b は、外区外圓線を彫り直し、内圓線より高くする。蓮子を高く大きく彫り直す。中房圓線内側を彫り込み、中房圓線が太く高く、中房内径が狭くなる。范型の磨耗の為、子葉は不鮮明となり、無子葉單弁蓮華紋にみえる。51 A c は、蓮弁を彫り直して高くし、子葉および間弁が完全に無くなる。中房蓮子を再度彫り直し、高く大きくしたことで、中心蓮子と周囲の蓮子が接合する。中房圓線も高く彫り直す。51 A d になると、中房以外はすべて彫り直す。蓮弁は、当初の面影も無く、珠形の無子葉單弁となっている。内外圓線も彫り直しされ、同じ高さとなり、太くなる。内外圓線間の珠紋も彫り直しされ、内外圓線と珠紋が接合し、幅線紋にみえる。造瓦技法に関しては、各段階ともほぼ同じである。瓦当裏面への丸瓦接合に際しては、強めのユビナデにより接合溝を設け、丸瓦を接合する。瓦当裏面はナデにより平坦に仕上げ、瓦当裏面接合部の形状は半円形である。凸面瓦当付近はタケズリ。瓦当厚に關しては A d 段階が、他の段階資料に比して 2 倍近く厚い。51 A a は東三坊大路東側溝で、51 A b は奈良町遺跡で同範品が出土。櫟本庵寺例は 51 A d と同範の可能性が高い。なお、51 A は平安時代以降の軒丸瓦では、最も出土量が多く 85 点ある。内訳は、A a 7 点、A b 38 点、A c 9 点、A d 3 点、A 種とまで判るもの 28 点である。

55 型式は中房周囲に雄蕊帯がある複弁蓮華紋。A 種がある。8 弁である。瓦当裏面丸ん接合部に強めのユビナデで接合溝を設け、丸瓦を接合する。外縁は未調整。興福寺 VI 丸 E 5、府招提寺例は同範の可能性が高い。

60 型式は中房内に右巻きの二巴紋を配した複弁蓮華紋。A・B の 2 種がある。A 種は 6 弁。間弁の一部に半

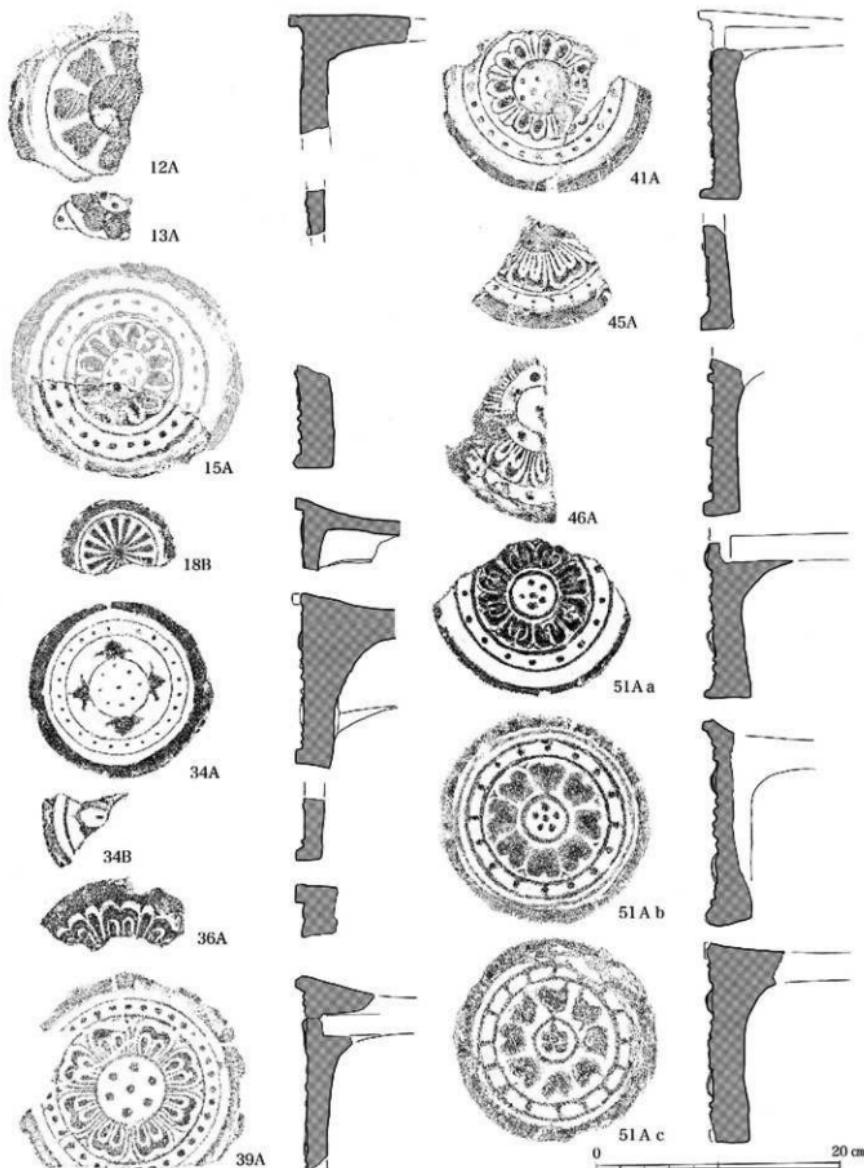


図1 大安寺旧境内出土平安時代以降の軒丸瓦 ① (1/4, 15 A薄折本は法隆寺藏品)

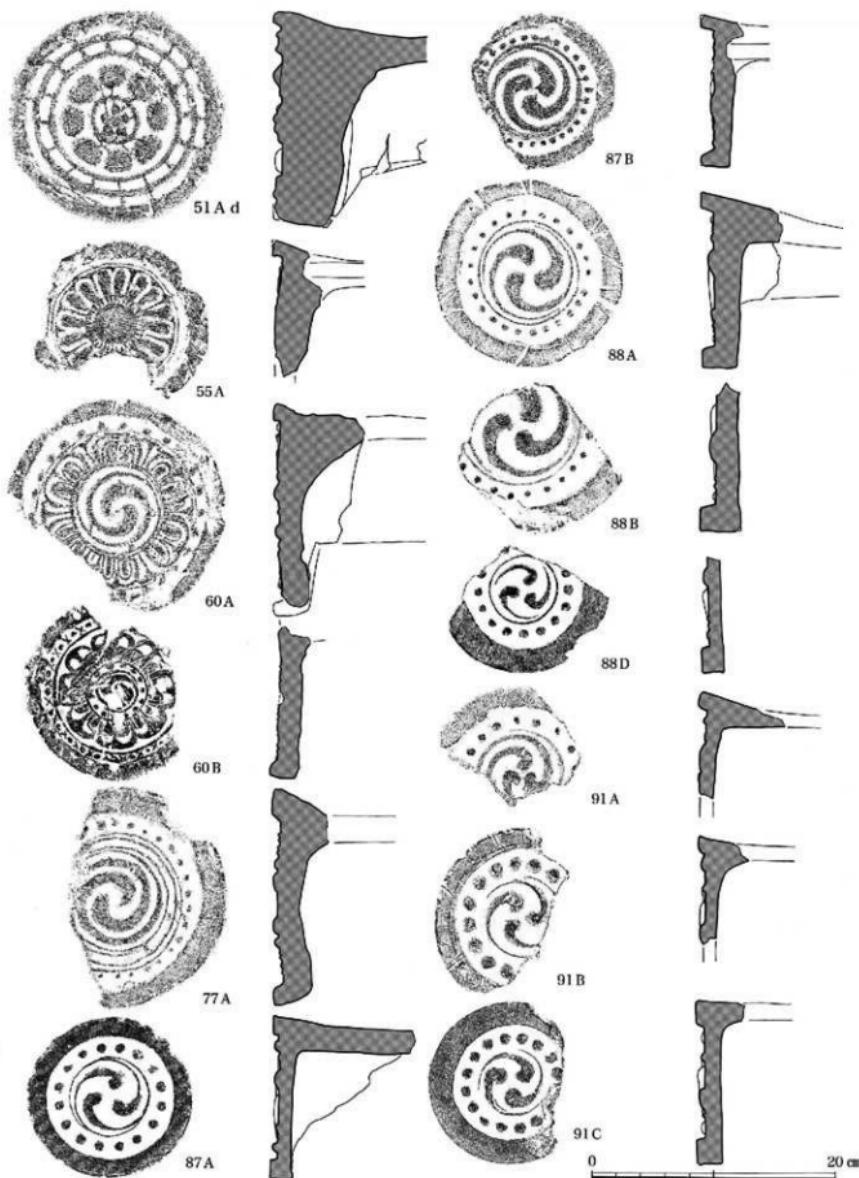


図2 大安寺旧境内出土平安時代以降の軒丸瓦 ② (1/4)

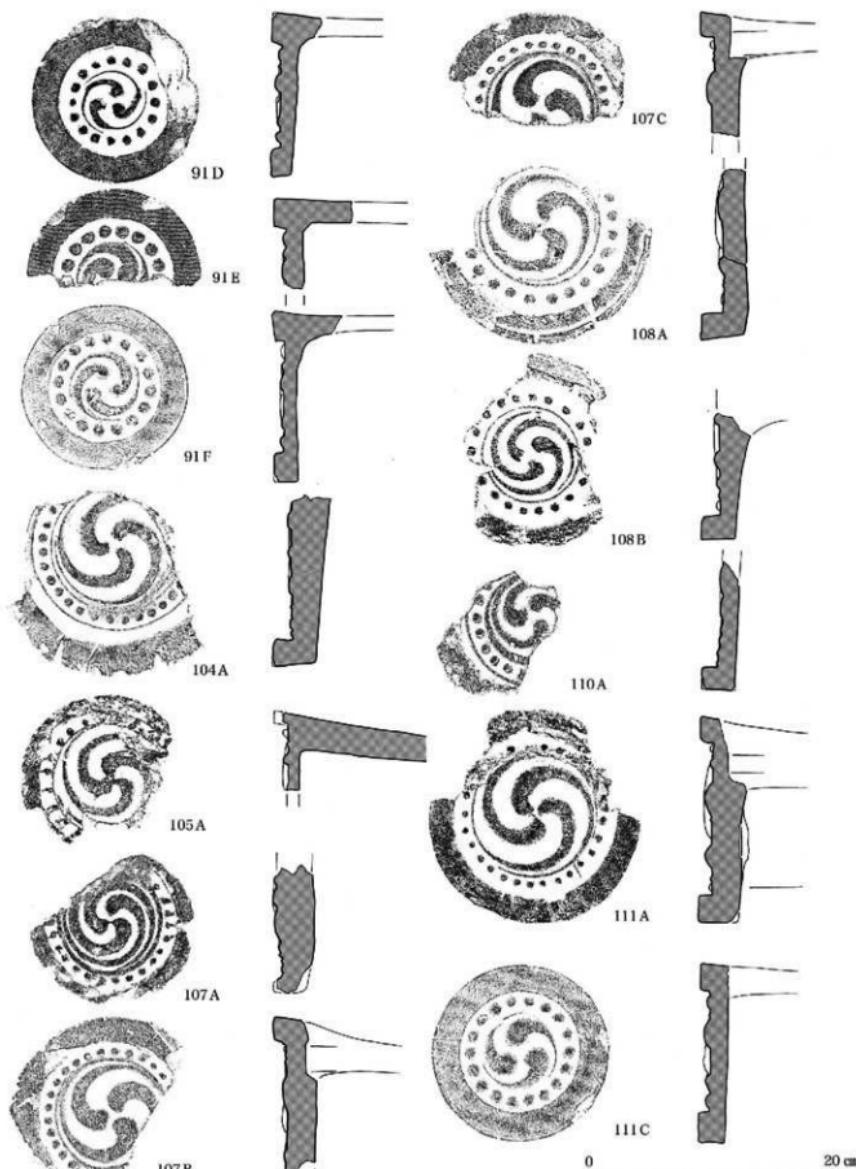


図3 大安寺旧境内出土平安時代以降の軒丸瓦 ③ (1/4)

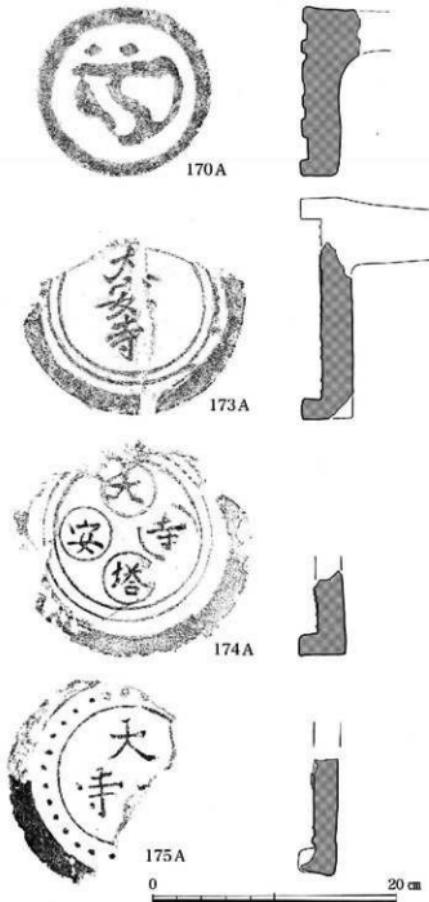


図4 大安寺旧境内出土平安時代以降の軒丸瓦④ (1/4)

分離された子葉を表現する。凸面瓦当付近は縦方向に粗くユビでナデツケ、接合部から瓦当下辺にかけてユビで粗いナデツケを施す。B種は中房巴紋の外側に珠紋をめぐらし、その外側に8弁蓮華紋を配する。瓦当下半部側面はヨコケズリ。長谷寺出土品は同範で、範傷進行から大安寺60Bに先行する。興福寺例は同範の可能性が高い。

77型式は左巻きの二巴紋。A種がある。巴の尾は長く圓線状にめぐる。巴紋の外側には圓線をめぐらす。観察した調整等の造瓦技法は60Aと同じである。

87型式は左巻きの三巴紋で、巴の頭同士は分離し、

尾は内圓線に接続する。外圓線は無く、外区は珠紋。A・B2種がある。A種は巴紋の尾部が細い。瓦当面にキラコが確認できる。外縁はナデを施す。B種はA種に比べ巴頭部が尖り気味で、巴の頭同士も近い。外縁は未調整。

88型式は左巻きの三巴紋で、巴の頭同士は分離し、尾は内圓線につかない。外圓線は無く、内圓線の外側に珠紋をめぐらす。A・B・Dの3種がある。A種は巴の頭同士が近く、巴の頭は円形で、巴紋の断面は半球状である。外縁は未調整である。凸面瓦当付近はタテナデ調整。瓦当裏面は接合部に沿ってナデまわす。瓦当裏面下半部側面および瓦当裏面下半部はヨコナデで調整する。春日東塔南回廊・三面築地界例は同範の可能性が高い。B種は復原すると、88型式の中で直径が最も大きい。観察した調整等の造瓦技法はA種と同じである。D種は巴紋が小振り。巴の頭は大振りの円頭で、断面は高い半球状、巴の尾が短いオタマジャクシ形である。瓦当面にキラコが付着する。外縁はナデを施し、平滑に仕上げる。外縁端部はヨコケズリで幅5mm程度の面取りを行う。

91型式は左巻きの三巴紋で、内外ともに圓線は無く、巴紋の外側に珠紋をめぐらす。A・B・C・D・E・Fの6種がある。A種は巴の頭部は小さく尖り気味で、カギ状に曲がる。巴の頭同士は互いに近く、中央はやや盛り上がる。外縁は未調整。B種は巴の胸部が細い。瓦当面にキラコが確認できる。外縁はヨコナデ。C種は巴紋の径が小さい。D種はC種に似るが、C種に比べて巴の頭同士が近い。E種は91型式の中で、巴の頭が最も大きく、胸部も最も幅広い。F種はD種に似るが、D種に比べて、巴の胸部幅が広い。C～F種は巴がオタマジャクシ形である点、瓦当面にキラコが付着する点、外縁に丁寧なヨコナデを施して平滑に仕上げる点、外縁端部にヨコケズリで幅3mm程度の面取りを行う点が共通する。

104型式は右巻きの三巴紋で、巴の頭同士は分離し、尾は内圓線につかない。内圓線と外圓線があり、外区内縁には珠紋をめぐらす。A種がある。巴の頭同士が互いに近い。巴頭部は尖り気味、巴紋はやや高く丸みをおびる。内圓線に比して外圓線は太高い。外縁は未調整。

105型式は右巻きの三巴紋で、巴同士の頭部は接し、尾は圓線につく。内圓線のみある。内圓線の外側に珠紋をめぐらす。A種がある。巴頭部が尖る。巴紋は丸みを帯び、やや高い。珠紋帶には範傷が確認できる。

107型式は右巻きの三巴紋で、巴同士の頭部は分離する。尾は圓線につき、内圓線のみある。内圓線の外側には珠紋をめぐらす。A・B・Cの3種がある。A種は巴の頭同士が互いに近い。巴頭部は尖り気味である。巴紋

はやや高く丸みをもつ。B種はA種より巴紋が大きい。C種はB種に似るが、巴の頭同士はB種より離れる。B・C種は巴頭部が円形に近い点、巴紋はやや高く丸みを持つ点、外縁が未調整である点が判じである。

108型式は右巻きの二巴紋で、巴同士の頭部は分離する。尾は圓線につかない。内圓線のみある。内圓線の外側に珠紋をめぐらす。A・Bの2種がある。A種は巴頭部がわずかに尖る。巴の頭同士は互いに近く、範脇の為、接続しているようにみえる箇所がある。巴紋はやや高く丸みを帯びる。外縁は未調整。B種はA種に比して巴紋が小さい。巴頭部は、2つが尖り気味で1つは円形に近い。巴紋はやや高く丸みをもつ。外縁は未調整である。

110型式は右巻きの三巴紋で、巴の頭同士は分離し、尾は圓線上に巡る。外圓線のみある。外区内縁は珠紋。A種がある。巴の頭同士が互いに近い。巴紋はやや高く丸みをもつ。巴頭部は尖り気味である。外縁は未調整。

111型式は右巻きの二巴紋で、巴同士の頭部は分離する。内外ともに圓線は無い。巴紋の外側には珠紋。A・Cの2種がある。A種は瓦当中央にコンバス針痕が確認できる。巴の頭同士は互いに近い。巴頭部は尖り気味である。巴の尾は長く圓線上にめぐる。外縁未調整。C種はA種に比べ巴紋の径が小さい。巴はオタマジャクシ形。瓦当面にキラコが付着する。外縁は丁寧なヨコナデを施す。外縁端部はヨコケズリで幅約3mmの面取りを行う。

170型式は内区に文字をあらわした文字紋である。A種がある。内区に胎藏界大日如来を表す梵字（アーケ）の1字をあらわす。法勝寺例は同范の可能性が高い。

173型式は内区に文字をあらわし、内区と外区を圓線で分かつ。A種がある。内区に「人安寺」の3字を縦書きする。瓦当裏面に指で浅い溝を掘り、先端木加工の丸瓦を接合する。瓦当裏面はヨコナデで平坦に仕上げる。瓦当下半部側面はヨコナデを施す。外縁は未調整である。

174型式は内区に文字をあらわし、各文字を圓線で囲み、さらに内区と外区を圓線で分かつ。A種がある。内区に「大安寺塔」の文字を配する。観察した調整等の造瓦技法は173 Aと同じ。法隆寺74 Aは同范である。

175型式は内区に文字をあらわし、内区と外区は圓線で分かれ、外区内縁には珠紋をめぐらす。A種がある。文字は上に「人」を、その左下に「寺」を配しており、右下には「安」を配するとみられる。観察した調整等の造瓦技法は173 A・174 Aと同じである。

軒平瓦(図5~8)

202型式は内区中央部に連珠紋を、その両端に×や*紋を飾る幾何学紋。A種がある。瓦当上縁に面取り行う。

頸貼り付け技法。頸部は横方向のナデを、瓦当裏面はタテケズリを施す。頸接合部側縁付近に凹型台の痕跡が残る。浦坊磨寺例、西安寺例は同范の可能性が高い。

203型式は劍頭紋を内区に飾る幾何学紋。A種がある。内区上部に圓線をめぐらした連珠紋を、内区下部に下向きの劍頭紋を配する。粘土板を重ねて成形する。薬師寺293、法隆寺例、頸安寺例は同范の可能性が高い。

205型式は連珠紋を内区に飾る。A・Bの2種がある。A種は内区と脇区を分ける界線が無い。頸裏面に補強用粘土を用いる瓦当貼り付け技法。頸接合部側縁付近に凹型台痕跡。瓦当上縁に面取り。頸面はヨコナデ、頸部瓦当裏面はタテケズリのちヨコナデ。B種は小型品。観察した調整等の造瓦技法は205 Aと同じである。

215型式は波状に上下する唐草紋を展開させ、その間に珠紋を配す紋様を内区に飾る。A種がある。粘土板を重ねて成形する。凸面はタテケズリの後、丁寧なタテナデを施す。元興寺例、興福寺例は同范の可能性が高い。

220型式は右から左へと偏行する唐草紋を飾る。A種がある。6回反転である。A種には外区と右脇区を切り詰めた資料があり、改範前をA a、改範後をA bとする。A a種は頸貼り付け技法。瓦当上縁にヨコケズリによる面取りを施す。A a種は興福寺例と同范の可能性が高い。A b種は法成寺例と同范である。

222型式は左半の唐草が左から右へと反転し、右半の唐草が右から左へと反転する。A種がある。左半部が5回反転で、右半部の反転数は、同范の可能性が高い。薬師寺332、法隆寺230 A、仁和寺例から6回反転とわかる。なお、奈良町遺跡出土例も同范の可能性が高い。頸接合部に凹型台の痕跡が残る。瓦当上縁はヨコケズリにより面取りする。頸部・瓦当裏面はヨコナデを施す。

229型式は変形忍冬唐草紋。A種がある。平城京6644型式に似ており復古調であろう。瓦当上縁はヨコヘラケズリにより面取りを施す。凸面頸付近はタテヘラケズリを施す。紋様構成から薬師寺249は同范の可能性がある。

231型式は双頭渦紋を中心飾りとする均整唐草紋。A・Bの2種がある。A種は干葉上下に、小さな文葉を配する。平瓦部凸面はタテケズリで頸段部を削り出し、のちヨコナデで、浅い段頸に調整する。凹面は瓦当付近にヨコケズリを施す。B種は中心飾りが小さい。凸面は頸部付近に斜め細叩き痕跡を残し、平瓦部に縦位の細叩き目を残す。横井庵寺Y K H-11は同范である。

232型式は3回反転均整唐草紋で主葉が連続し、支葉が長く伸びる。A種がある。凸面は頸部に強用粘土を貼り付け、タテケズリ。紋様構成から、対葉花紋の中心飾

大安寺田境内から出土した平安時代以降の軒瓦

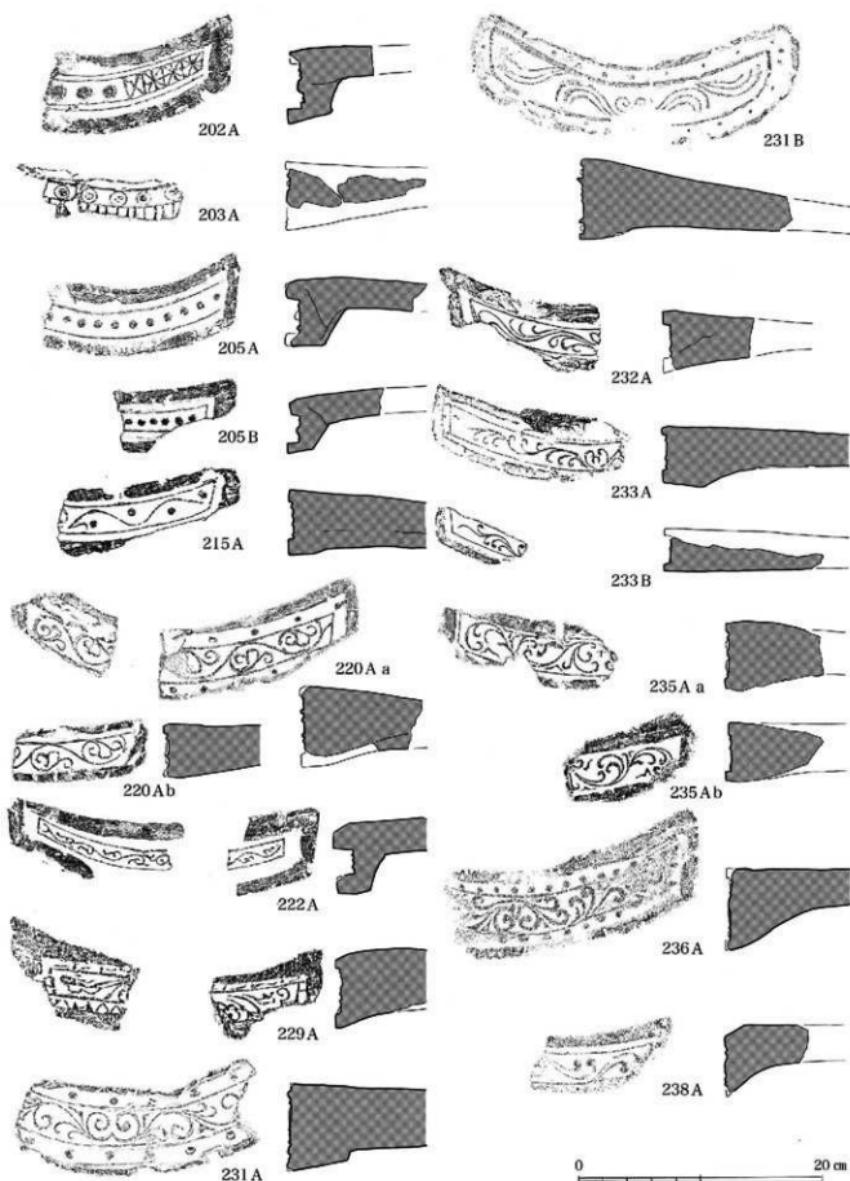


図5 大安寺田境内出土平安時代以降の軒平瓦 ① (1/4)

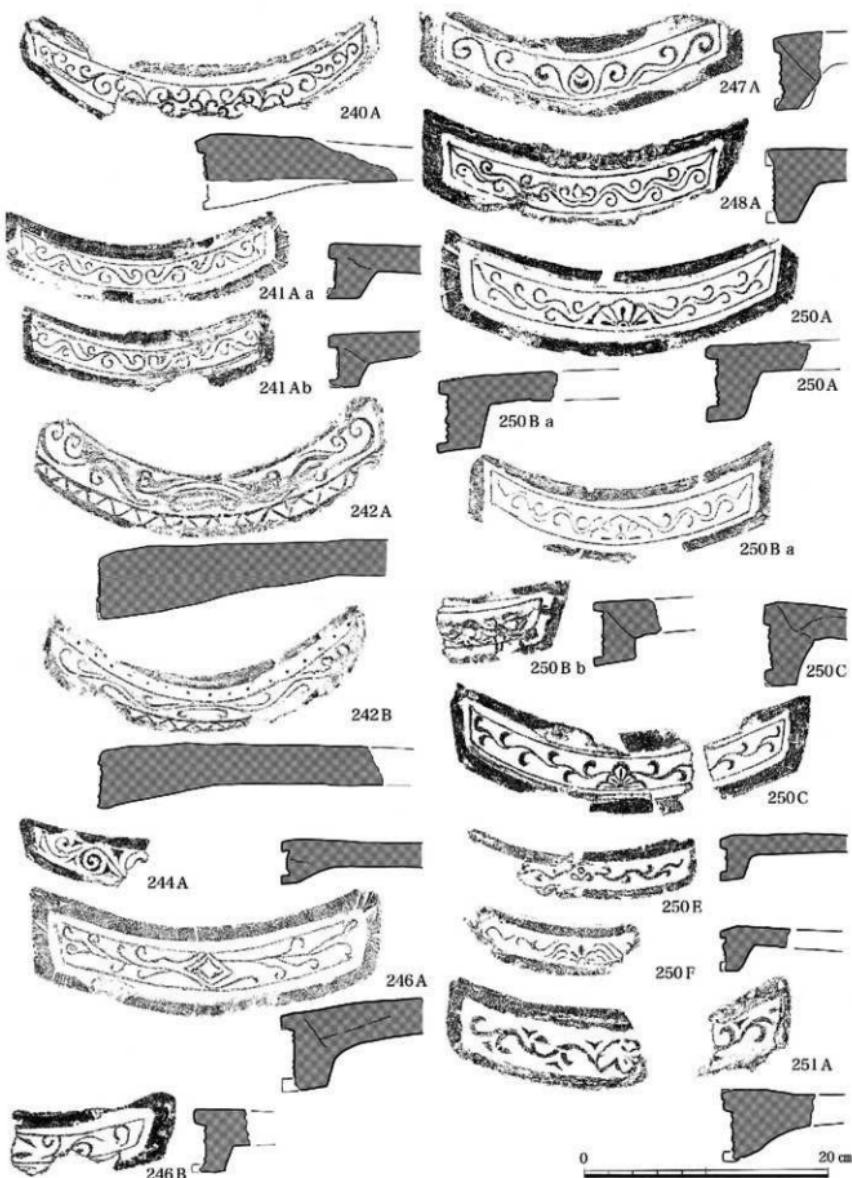


図6 大安寺旧境内出土平安時代以降の軒平瓦 ② (1/4)

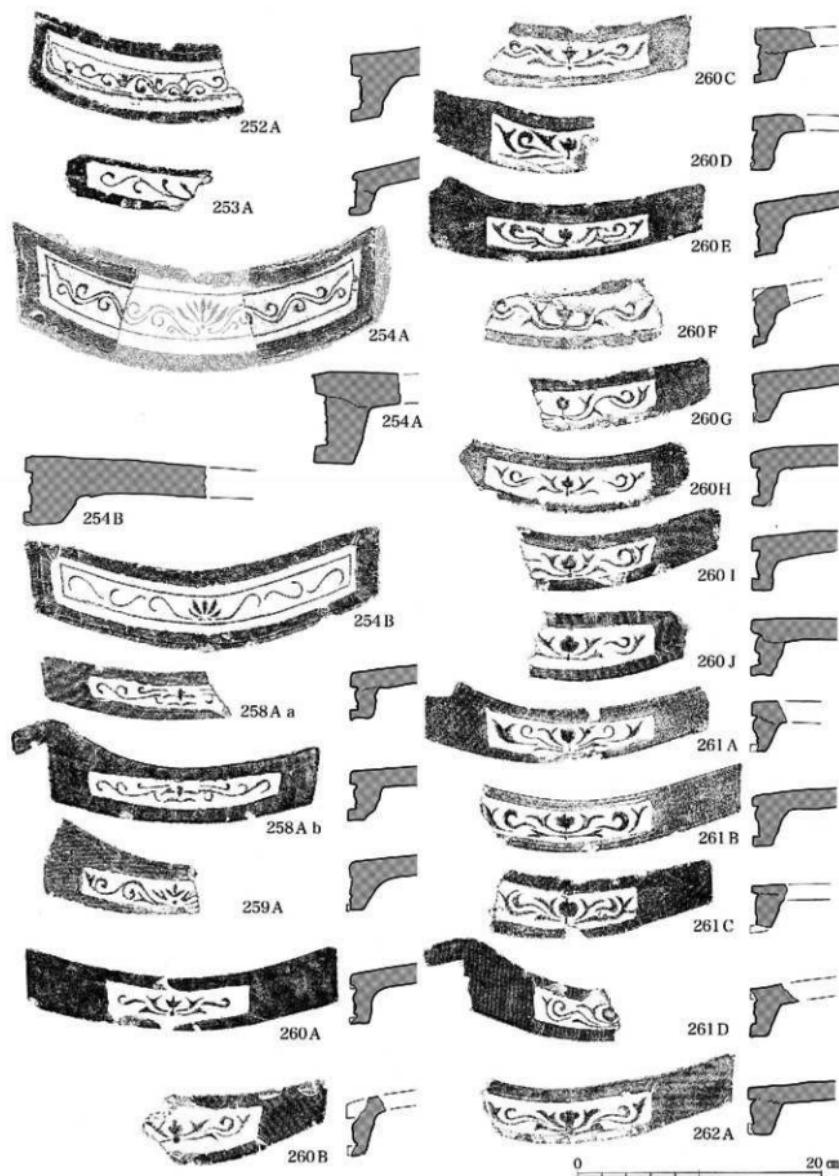


図7 大安寺境内出土平安時代以降の軒瓦 ③ (1/4, 254 A薄板木は西大寺出土品で、奈文研蔵)

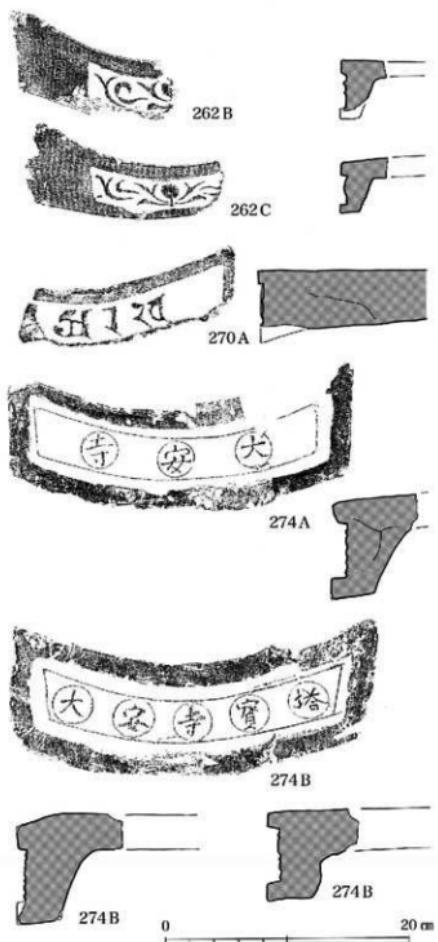


図8 大安寺跡境内出土平安時代以降の軒瓦④(1/4)

りを持つ薬師寺250の左部分の可能性が考えられる。

233型式は中心部分逆U字形を対葉花紋で囲んだ中心飾りを配し、主葉が連続する4回反転均整唐草紋。A・Bの2種がある。A種は頸用粘土を貼り付けた顎貼り付け技法である。B種は233型式の小型品とみられる。凸面には縦位の綱叩き目が残る。薬師寺259は同範の可能性が高く、同範であれば4回反転均整唐草紋とわかる。

235型式はT字形を対葉形が囲む中心飾りをもつ均整

唐草紋。A種がある。3回反転である。外区を切り詰めた改範資料があり、改範前をAa、改範後をAbとする。Aa種は興福寺VI平E1、東大寺360³⁰Aと、Ab種は平安宮例、興福寺例とそれぞれ同範の可能性が高い。

236型式はU字形を対葉形が囲む中心飾りをもつ均整唐草紋。A種がある。3回反転である。頭は糸切りした粘土板に頸用粘土を接合し、のち瓦当側から平瓦部の方向にナツケを施して成形する顎貼り付け技法である。

238型式は中心にY字形を配し、その左右に下向きの対葉形をおき、2回反転する均整唐草紋。A種がある。A種は右半部破片だが、薬師寺269、興福寺VI平C1、西大寺276B、店招提寺例、平等院NH023は同範の可能性が高い。瓦当上縁はヨコケズリし面取りする。

240型式は対向させた唐草紋の上に逆U形を配した中心飾りをもつ均整唐草紋。A種がある。顎貼り付け技法。凸面はタテケズリのちタテナデを施す。瓦当上縁はヨコケズリで面取りする。平等院NH018は同範の可能性が高い。240Aの範型の界線を太く彫り直し、外縁とした改範資料が、薬師寺例、興福寺VI平D8である。

241型式は対向させた唐草を中心におく均整唐草紋。A種がある。左右の主葉は連続するが、支葉は分離する。範の両端を切り詰めた改範資料があり、改範前をAa、改範後をAbとする。出土点数の内訳は、Aa5点、Ab2点、A種とだけ判るもの8点である。Aa・Ab種とともに観察した調整等の造瓦技法は同じである。瓦当貼り付け技法である。瓦当上縁はヨコケズリで面取りを行う。頭面・瓦当裏面はヨコナデを施す。頭接合部には凹型台の圧痕がある。Ab種は西大寺327A、宮町遺跡例と同範で、大安寺ではAa・Ab両者とも出土していることから、改範後もしばらく大安寺へ供給した後、西大寺・宮町遺跡へ供給されたと考えることができる。なお、秋篠寺例もAb種と同範の可能性が高い。

242型式は中央下方に下向きの唐草紋をおき、この上に、主葉が連続して流れる均整唐草紋を飾る。A・Bの2種がある。A種は大型。下外区は線鉛齒紋、上外区・脇区は切り詰められている。凹面瓦当付近をヨコケズリ。凸面はタテケズリの後タテナデ。B種は小型。上外区は珠紋、下外区は線鉛齒紋。観察した調整等の造瓦技法は242Aと同じ。薬師寺246、西大寺270Aは同範。古市廃寺例、横井磨寺YKH-12は同範の可能性が高い。

244型式は渦状の唐草紋。A種がある。主葉間に楔形の支葉を配する。瓦当上縁には面取りを施す。顎貼り付け技法である。頭部・凸面平瓦部はタテケズリを施す。

246型式は菱形を中心飾りとする均整唐草紋。A・B

の2種がある。A種は唐草の主葉が連続する。瓦当貼り付け技法である。瓦当上線にヨコヘラケズリによる面取りを行う。頸接合部には凹型台の圧痕が残る。尾道淨土寺例は同范である。B種は唐草が連続しない。3回反転。瓦当外縁はナデにより調整され、瓦当上縁はヨコケズリにより面取りを行う。瓦当貼り付け技法。瓦当裏面はヨコナデ。頸接合部側縁付近に凹型台の圧痕がある。

247型式は宝珠形を中心飾りとする均整唐草紋。△種がある。3回反転。瓦当外縁はヨコナデにより調整。瓦当貼り付け技法。瓦当裏面はヨコナデ。頸接合部には凹型台の圧痕がある。元興寺³²は同范の可能性が高い。

248型式は水滴形を中心葉が押む中心飾りをもつ均整唐草紋。A種がある。5回反転。瓦当上縁はヨコケズリし、面取りを行う。瓦当貼り付け技法。頸接合部側縁付近に凹型台の圧痕がある。元興寺例は同范で、右端に範傷が認められるのに対し、大安寺248 Aには無いことから、大安寺供給後、元興寺に供給されたとわかる。

250型式は半截花紋を中心飾りとする均整唐草紋。A・B・C・E・Fの5種がある。A種は3弁半截花紋が中心飾り。唐草は分離し、6回反転。瓦当上線をヨコヘラケズリし面取りを行う。瓦当貼り付け技法。頸後縁に面取りを施すものと施さないものがある。頸接合部側縁付近に凹型台の圧痕がある。西大寺343 A、興福寺X平C 1は同范の可能性が高い。B種は3弁半截花紋が中心飾りで、A種の小型品。唐草は分離し、5回反転。瓦当貼り付け技法。B種には紋様をトレースするように彫り直し、右第3单位支葉を彫り加えたものがあり、改版前をB a、改版後をB bとした。B aには凸面頸段部調整はヨコナデするものと、タナデするものがある。頸後縁の面取りに関しては、有るものと無いものがある。頸接合部側縁付近に凹型台の圧痕。西大寺343 B、宮町遺跡例は同范で胎土も同じである。春日東塔南回廊・三面築地屏例、蘆光寺例は同范の可能性が高い。B bは凸面頸段部調整がヨコナデ調整である。頸後縁の面取りを行う。C種は中心飾りが5弁半截花紋。唐草の主葉は連続し、7回反転。瓦当上縁をヨコケズリし面取りを行う。瓦当貼り付け技法。頸面・頸部瓦当裏面をヨコナデ調整する。頸接合部側縁付近に凹型台の圧痕がある。尾道淨土寺例は同范。E種は3弁半截花紋が中心飾り。唐草は逆続し5回反転。瓦当貼り付け技法。面縁は瓦当上縁と側縁付近にヘラケズリを施す。頸面・頸部瓦当裏面はヨコナデ調整を行う。頸接合部に凹型台の圧痕がある。F種は中心飾りが5弁半截花紋。中心飾り左右に水波紋を配し、その外側に府草紋を展開する。瓦当上縁、頸部後縁を面取りする。

頸面・頸部瓦当裏面・凸面半瓦部はヨコナデ。中心飾りとその右側の水波紋間および、左第1・2単位唐草間に範傷が確認できる。法隆寺272 Jは範傷も一致し、同范であろう。ただし、左唐草第3単位が法隆寺272 Jでは巻き込みます、大安寺250 Fでは巻き込んでいる。したがって、法隆寺272 Jの左第3単位唐草を巻き込むように彫り加えたものが大安寺250 Fとみることができ、大安寺250 Fが後出の可能性がある。

251型式は宝相華紋を中心飾りとする均整唐草紋。A種がある。左単位が4回反転、右単位は3回反転とおもわれる。凹面は瓦当付近をヨコケズリ。凸面はタテケズリの後、頸部にヨコナデ。頸貼り付け技法。興福寺V平A 11、薬師寺281、西大寺286 Aは同范の可能性が高い。

252型式は逆V字形を中心飾りとする均整唐草紋。A種がある。左単位は6回反転。頸接合部側縁付近に凹型台の圧痕を残す。頸部瓦当裏面はタテケズリのちヨコナデを施す。東福寺⁵³、姫路市松原八幡神社例⁵⁴、京都柏社遺跡例⁵⁵、上清瀧遺跡例⁵⁶は同范の可能性が高い。

253型式は3葉紋を中心飾りとする均整唐草紋。A種がある。瓦当外区全体を削り、瓦当上縁を面取りする。平瓦接合面にカキメを施した頸貼り付け技法である。頸後縁はヨコケズリにより面取りを行う。頸面・頸部瓦当裏面はヨコナデを施す。瓦当面にキラコが確認できる。

254型式は中心に横視した蓮瓣紋をおく均整唐草紋。A・Bの2種がある。A種は5回反転。凸面頸面・頸部瓦当裏面はヨコナデ。瓦当貼り付け技法。頸接合部側縁付近に凹型台の圧痕。西大寺350 Aは同范、比叡寺例⁵⁷は同范の可能性が高い。B種は3回反転。瓦当上縁・下縁に面取りを行う。凸面はタテケズリした後に、頸部をヨコナデ。頸接合部側縁付近には凹型台の圧痕が残る。

258型式は一葉紋の左右に2本の支葉を配した中心飾りをもつ均整唐草紋。A種がある。中心飾り上部左右に長めの支葉を配する。唐草は連続し3回反転。瓦当外区全体を削る。平瓦接合面にカキメを施した頸貼り付け技法である。頸面・頸部瓦当裏面はヨコナデを施すが、特に頸段部には強めのユビナデを施す。△種には中心飾りおよび、その左上部の支葉をトレースするように太く彫り直したものがあり、彫りなおし前を△ a種、彫りなおし後を△ b種とした。△ b種は左端が鎌形の軒棟瓦である。A a・A b種ともに瓦当面にはキラコが確認できる。

259型式は3叉の花弁の下、左右に各々2叉の1葉をおく中心飾りをもつ均整唐草紋。A種がある。唐草が連続し、2回反転。瓦当外区全体を削る。頸面・頸部瓦当裏面はヨコナデを施す。瓦当面にキラコが確認できる。左

端が鐘形の軒棟瓦である。正暦寺 130 A⁶²は同範である。

260 型式は3又の花弁を持つ橋唐草紋。A～Jの10種がある。A種は唐草が第2単位までしか無い。B種は花弁基部が梢円形で、花弁に接続。C種は第3単位唐草が2又にならない。D種は下部第1単位唐草が長い。E種は唐草が花弁下部から連続する。F種は上部第1単位の唐草が大きく屈曲し、唐草は花弁下部から連続する。G種は紋様構成がF種に似るが、やや小型。H種は第1単位と第2単位との唐草の間隔が広い。I種は第2単位唐草が260型式の中で最も大きい。J種は花弁が260型式の中で最も大きい。これら10種は外縁に丁寧なヨコナデを施し、平滑に仕上げる点、外縁端部はヨコケズリで幅3～5mmの面取りを行う点、平瓦接合面にカキメを施した顎貼り付け技法である点、で造瓦技法が同じである。

261 型式は花弁が球状を呈する橋唐草紋。A・B・C・Dの4種がある。A種は両端の唐草が太い。B種は下部第1単位の唐草が2又。C種は第2単位唐草が山曲する。第3単位唐草両端に范傷が確認でき、右端の唐草はこの范傷により3又にみえる。D種は第2単位唐草の巻きが強い。これら4種は260型式と造瓦技法が同じである。

262 型式は花弁が3弁であるが、左右の弁が大きく、昆虫の眼球風の橋唐草紋。A・B・Cの3種がある。A種は第2単位・第3単位の唐草が長い。B種は第2単位の唐草が大きい。C種は第2単位の唐草が短く小さい。これら3種は260・261型式と造瓦技法が同じである。

270 型式は梵字をあらわした文字紋。A種がある。右端から「キャ・ラ・ア」とあり、「キャ・カ・ラ・バ・ア」の五大種字をあらわしたものと考えられる。顎貼り付け技法である。凹面はタテナデを施し、顎付近のみヨコナデを行なう。薬師寺 285、唐招提寺例、法勝寺例、円勝寺例はよく似るが、異形である。

274 型式は内区に横線で囲んだ文字をあらわし、内区と外区を界線で分かつ文字紋。A・Bの2種がある。A種は「大安寺」の3文字を右から左に配する。頭裏面に補強用粘土を用いる瓦当貼り付け技法である。頭面はヨコナデ、頭部瓦当裏面・凸面平瓦部はタテケズリを施す。頭接合部側縁付近には凹型台の圧痕がある。凹面は瓦当沿いをヨコケズリするが、他は布目模。凹面両側端部はタテケズリ。西大寺 387 Aは同範の可能性が高い。B種は「大安寺寶塔」の5文字を左から右に配する。観察した調整等の造瓦技法はA種と同じであるが、1点だけ頭部瓦当裏面と頭段部にヨコナデを施すものがある。

Ⅲ 各軒瓦の年代観

II章で紹介した軒瓦は、大半が包含層からの出土であ

り、層位的事実や共伴土器にもとづく検討には限界がある。そのため編年にしては、史料にみえる平安時代以降の大安寺塔塔の造営・修理・被災記事を集め（表1）、他寺院出土同範瓦の年代観や、造瓦技法の変遷を併せて検討し、図9のように13期に編年した。

平安前期は長岡京遷都がなされた延喜3(784)年から、延喜11(911)年の延喜火災に遭う前までである。この時期、史料では造瓦を要したとみられる造営工事は大同2年(807)の塔中院建立のみである。しかし、発掘調査成果では、西中房南列の西側で、西小子房とみられる10世紀前半頃の礎石建物が発見されている。また西塔の調査でも、その完成は平安時代まで下ることが指摘されており、平安前期には、いまだ境内各所で活発に造営工事が行われていたことがうかがえる。

平安前期に比定できる軒瓦には、軒丸瓦15 Aと51 A、軒平瓦は231 Aと236 Aがある。大安寺15 Aは法隆寺15 Aと同範で、法隆寺15 A aは法隆寺242 Aと組合。貞觀元年(859)の遺詔による修理時の所用瓦と考えられている。大安寺では法隆寺242 Aの同範品は出土していないが、法隆寺242 Aと紋様が似るものに231 Aがあり、大安寺では15 A～231 Aという組み合わせで、平安前期に使用された可能性を考える。236 Aは、紋様構成が奈良時代の「大安寺式」軒瓦、平城京6716型式に似ることから平安前期に比定した。51 A aは同範品が平城京東三坊入路東隅溝で延喜通宝と共に出土しており、この銭貨の初鋤である908年以前とされている。51 A b・c・dに関しては、造瓦技法が共通する為、製作の断絶は無く、收斂しながら連続して製作されていったものと考えられる。ただしA dは、瓦当厚が大きく、A cとA dの製作時間差は広くみたほうがよいのかもしれない。51 Aと組み合う軒平瓦は、西塔の調査で明らかになった。軒丸瓦では51 Aが、軒平瓦では奈良時代とみていた6712 Bが最も多く西塔から出土し、51 A～6712 Bで使用されていることが判明した。櫻本磨寺では51 A dと6712 Bの同範の可能性が高い両者が採集されており、このことからも、51 Aと6712 Bは組み合うとして良い。6712 Bの範型製作年代に関しては、その紋様構成から、奈良時代の可能性も残り、範型製作は奈良時代であるが、その範型を用いた軒平瓦の製作は平安時代以降も続いている可能性が考えられる。

平安中期は延喜11(911)年の火災から、寛仁元(1017)年の火災に遭う前までである。史料では延喜11(911)年に講堂・三面僧房が焼失、犬脣3(949)年に西塔が雷火にあったと記されているが、いずれも修理に関する記

大安寺旧境内から出土した平安時代以降の軒瓦

表1 貞观京遷都後の大安寺略年表(主に造営・被災関連)

西暦	和暦	月日	事項
784	延暦3	11.11	長門京遷都。『詔日本紀』
790	延暦9	12.28	氣武天皇の母、高野折の「周遍」を行う。『詔紀』
806	大同1	4.22	大安寺・秋藤寺等に光孝天皇の五七日の香を設ける。『日本後紀』
807	大同2	8.17	八幡宮・吉備津を宇佐より移し、大安寺の東京第七鹿石清水房に安置し、次いで南大門(南中門)・南面西脇に塔中院(圓月寺)、八間四面瓦葺きを建立する。『大安寺唐院記』
859	貞觀1	-	圓月院僧法成の大雨宮を西僧房南端に建立する。『大安寺唐院記』
863	貞觀5	7.27	新筑・既存の修繕工事として、既存100貫・缺100貫を施入。『日本三代史跡』
876	貞觀18	7.18	雨、雷雨により倒壊する。『日本三代史跡』
911	延喜11	5.1	講堂、面崩房が焼失する。『一代要記』
949	開元3	11.10	富士より西塔が焼失する。『小紀記』
989	永承1	8.13	大風で塔の難敵が落ちる。『東寺重源記』
999	長保1	10.15	順序不明成参路。この時点での別当、平顕がこの頃までに創建の小修理を行い、修造が行き届き「殊なる破損なし」と記される。『詔記』
1017	寛仁1	3.1	大安寺が焼失する。北塔、积迦迦来像1体のみ免れ。『日本紀略』・『扶桑略記』・諸家本『詔と御起業』
1018	寛仁2	5.11	東人別院当選覚が大安寺の再建を計り、那原實良の内意を図る。『小紀記』
1023	寛安3	12.27	造大安寺式を定め、沿革を記す。『日本紀略』・『小紀記』・『左経記』
		6.23	造大安寺式を改める。『小紀記』
		7.20	釋迦堂、造大安寺南門並木材木解文を見る。『小紀記』
		8.5	造大安寺門、造當の材木色目を伴述する。『小紀記』
		閏9.26	材木配分をさる。『小紀記』
1029	長元2	-	順延、別当となる。『大安寺別当次第』
			源経、小桜尚輔が造大安寺守官になる。『類聚將行記』
1035	長元8	10.29	順延、金戒造立によって宿禰となる。『僧團始在』・『大安寺別当次第』
1038	長曇2	4.8	造大安寺辰辰房を廃する。『公卿補任』
1041	長久2	9.13	大安寺が焼失する。『扶桑略記』
1047	永承2	2.12	興福寺が水承被災後の復興の為、人安寺瓦屋を拂り上げる。『治興福寺記』
1076	承保3	-	宝寧院1室と三重塔1基が焼失する。『大安寺御造天皇御院八島兩院記文』
1087	寛治1	12.28	順延、別当となる。任中に講堂を造立する。『中右記』・『大安寺別当次第』
1090	寛治4	12.24	この日までに命堂、東西奈門、中門、回廊、七通宝塔、倉、東西大門、西面梁垣等を修造する。また、寛治8年にかけて南廊、東西大門、僧房等を新造。『京都御所東山御御跡記』
1094	嘉祐1	5.29	門前を下し、満蒙、南大門など造営し、人安寺が大安寺の御道仏を奉見する。『中右記』
1098	承徳2	10.12	雁津が講堂を再建し、人々が大安寺の御道仏を奉見する。『中右記』
1101	應和3	1.24	水耕、別当となる。任中の1101年から1118年の間に順延、延義建立。『大安寺別当次第』
1116	永久4	5.23	水耕を御修理の形により法印印家。『帶範記』
1140	保延6	3.15	大正御遺、2度目の山崩七大寺の巡礼。西塔に歩道がいた金堂・講堂・七重塔棟、西僧房があり、西塔は礎石が残るのみで、東僧房も無いこと等を記す。『七大寺巡礼私記』
1204	元久1	4月	塔崩壊を防ぐ。『作持秋抄』
1213	建保1	12.30	順延、別当となる。『大安寺別当次第』
1253	建長5	10.2	順延、別当となる。任中に塔を修理する。『大安寺別当次第』
		-	宝性、塔・金堂四隅の修繕料を寄進する。『東寺寺文書』
1260	文応1	7月	順延、東大寺削当となり、定義、大安寺削当となる。『大安寺削当次第』
1266	文永3	-	順延並び、東大寺削当となる。任中に金堂の瓦葺き替え、南大門の修繕を行い、東西南面の人道と塔西面の大堀を築く。『東大寺文書』・『大安寺別当次第』
1296	永仁4	-	東塔が崩壊により廃し、『和漢春秋抄』
1345	興國6	6.23	興福寺造営料の大和上打段米を大安寺に移す。『春日神社文書』
1385	至祐2	3.29	民者初へ強盗が入り、放火。外巻僧坊及び、重宝焼失。翌月、円融勅諭。『經観要記』
1436	永享8	11.7	新坊へ強盗が入り、仏具・本尊等が奪われ、南大門の脇が破壊される。『經観要記』
1446	宝徳1	4.12	京成で大地震。『東院寺社鑑奉記』
1459	長徳3	9.10	人衆で金堂の東西側壁が崩壊する。『東院寺社鑑奉記』
1475	文明7	7.11	順延、人安寺命家・文政空巡礼、もと講堂、食堂、更窓にあった本尊を空堂で見る。『人承院寺社鑑奉記』
長保・寛正(1457~1460)頃	から文慶12(1480)頃	-	この切替、西塔の一部・文殊院・人承院・宣成・塔中院・八幡社があり、講堂、東塔に関しては炎上後、再建されていないことが記される。吉澤本『落成記』
1483	文明15	7.15	大安寺空院勅願念仏・『大安寺守社種事記』
1485	長享2	10.11	太廟、大安寺金堂を巡礼。『人承院寺社鑑奉記』
1494	明応3	5.7	大地震。『人承院寺社鑑奉記』・『振成丁度記』
1585	天正13	11.29	近畿、東海で大地震。堂舎人純。『鎌本家文書』
1590	天正18	12.15	一時住持による本堂修繕完成。『多聞院口記』
1596	慶長1	7月12	順延で大地震。堂舎ごとく被滅。『續本家文書』
1661	寛文1	-	大安寺は今、門前町の會のみ残ると記される。『南北・京地圖』
1675	寛延3	-	大安寺は今、御夢庵一宇のみ残ると記される。『南都名所集』
1711	正徳1	7月	海老寺の山崩が再興を企てる。『鎌本家文書』
1838	天保9	-	大安寺は今、小塔がこのころばかりと記される。『大和巡日記』

述は無い。ただし長保元（999）年、大安寺を参詣した藤原行成は、修造が行き届き、「殊なる破損無し」と『崇証』に記していることから、10世紀末頃までは延喜・天暦被災に対する再建事業が行われたのかもしれない。しかし、この時期に比定できる軒瓦は軒平瓦 231 B 1点だけである。231 B は 925 年から 995 年の間に比定されている法隆寺 242 F に紋様構成が類似し、同じく 10 世紀代とする横井庵寺 YKH-11 と同範であることから、平安中期に比定できる。軒瓦の種類・点数の多寡は、瓦葺建物の改修程度を表すものであろうから、延喜・天暦被災に対する再建があったのであれば、前代の瓦範を利用して製作された軒瓦で修理したのであろうか。あるいは檜皮など右機質の屋根材が使用されたのかも知れない。

平安後期 I は、寛仁元（1017）年の火災から、それに対する再建が一段落したとみられる承和 2（1100）年まで。寛仁の火災は被窓が大きく、『扶桑略記』は「遺るところ塔婆なり」と記し、翌年には造大安寺長官以下が任せられている。造大安寺長官は長曆 2（1038）年に薨されており、この頃までに、復興が概ね完了したことなどがわかる。承徳 2（1098）年には別当隆禪が講堂を新造したと記されていることから、講堂再建についてはこの頃までかかったことがわかる。なお、『造興福寺記』には永承元（1046）年に興福寺金堂が焼失し、再建にあたって必要な瓦を製作する瓦屋として、翌年に大安寺瓦屋を借り上げるという記事がある。しかしその後、大安寺瓦屋は興福寺金堂の瓦の製作を免除されているのであるが、金堂以外の建物に大安寺瓦屋が瓦を供給した可能性はあると考え、この大安寺瓦屋こそ、大安寺杉山瓦窯 4 号窯の造り替え前の窯ではないかとの指摘がある。

この時期に比定できる軒瓦としては、まず大安寺 39 A・242 A が挙げられる。大安寺 39 A は薬師寺 39 と同範の可能性が高く、大安寺 242 A は薬師寺 245 に似る。薬師寺では 39-245 の組み合せが成立し、天暦 4（973）年の火災後の再興時主要瓦で、973 年から 1040 年の間に比定されている。このことから大安寺 39 A-242 A の組み合わせの可能性が考えられる。さらに大安寺 242 B は、同様に天暦火災後の再建瓦と考えられている薬師寺 246 と同範で、大安寺 242 B は範例進行から、薬師寺 246 よりも後出と判明していることから、大安寺 39 A-242 A と 242 B を、薬師寺への供給が一段落したであろう、寛仁の大火灾後の復興期に使用された可能性を考え、平安後期 I に比定した。次に大安寺 46 A は、治安 3 年（1023）年の東院修理時の所用瓦である法隆寺 50 A と同範の可能性が高いことから、平安後期 I に比定した。大安寺

34 A は薬師寺 86 と同範で、範例の進行段階から、元来薬師寺が所有していた範型で、のち製品が大安寺に供給されたことが明らかにされている。薬師寺 86 は左から右へ偏行する唐草紋軒平瓦薬師寺 276 と組み合うとされているが、大安寺では薬師寺 276 の同範品は出土しない。ただし、大安寺 220 A b は薬師寺 276 の紋様構成の裏返しであることから、大安寺 34 A-220 A b の組み合せが指摘されている。薬師寺 86 が 1040 から 1080 年の間に考えられていることから、大安寺 34 A-220 A b は薬師寺供給後の平安後期 I に比定した。大安寺 60 B は同範品が長谷寺觀音堂で出土する。中房に巴紋を配した複弁蓮華紋軒丸瓦については、まず大阪府八尾市向山瓦窯産の河内系軒丸瓦が 11 世紀第 4 四半期に成立し、12 世紀前半期を通じて盛行したとする考え方があった。その後大安寺 60 B と同範の長谷寺觀音堂出土品こそ、中房に巴紋を配する複弁蓮華紋軒丸瓦の祖形と位置付け、11 世紀中頃とする考えが出されており、大安寺 60 B も平安時代後期 I に比定した。大安寺 55 A については、1078 年から 1103 年頃に比定される興福寺 VI 丸 E 5 と同範の可能性の高いことから、平安後期 I に比定した。大安寺 240 A については、改範資料が薬師寺出土品、興福寺 VI 平 D 8 と判明しており、供給順序は大安寺から薬師寺・興福寺の順であると指摘されている。興福寺 VI 平 D 8 は承暦 2 年（1078）の五重小塔再建時の所用瓦で、大安寺 240 A はそれ以前の平安後期 I に比定した。大安寺 13 A は興福寺 VI 丸 D 4 と、大安寺 235 A は興福寺 VI 平 E 1 と同範の可能性が高い。法隆寺では大安寺 235 A と紋様構成が似る法隆寺 252 A が、薬研状に窪める運弁を飾る法隆寺 14 B と組む。このことから大安寺では同じく薬研状に窪める運弁を飾る 13 A と 235 A が組合うと考える。興福寺 VI 丸 D 4、VI 平 E 1 ともに 1078 から 1129 年の間に比定されていることから、大安寺 13 A-235 A は平安後期 I 後半から II 期前半の間に比定した。大安寺 170 A と 270 A については、大安寺において瓦当面に梵字を飾る軒瓦が、このそれぞれ 1 種のみであることから、170 A-270 A の組み合わせを考えた。大安寺 270 A は薬師寺 285 と良く似ており、これが 11 世紀中頃から 12 世紀末の製作年代を与えられていることから、170 A-270 A も平安後期 I 後半から平安後期 II の間に比定した。大安寺 238 A については、これと同範とみられるものが薬師寺 269、興福寺 VI 平 C 1、西大寺 276 B、唐招提寺例で、範例進行から a・b・c の 3 段階に分けられている。大安寺 238 A は右第 3 単位の左側に範例が確認できることから b 段階

と判り、同段階が出土する興福寺では 1078 から 1129 年頃の年代観が与えられていることから、大安寺 238 A は平安後期 I の末から、平安後期 II と考えた。

平安後期 I の軒瓦は南都諸大寺との同範品が多く、寛仁火災後の再建事業には、人和諸大寺の協力が大きかったことがうかがえる。ただし、史料に見える被災建物の多さとその後の復興の規模とを考えると、その出土点数は少なすぎる。範型を長期使用している例は他の寺院でも確認されていることから、平安後期 I の時代になっても、奈良時代に製作した範型のうち、使用に耐えるものを利用して、軒瓦が生産されていたのであろうか。

平安後期 II は承和 2 (1100) 年から治承 4 (1180) 年までである。史料にみえる修造には永祿別当任中の 1101 年から 1116 年までの間に行われた鐘楼・経蔵の造立がある。経蔵の調査では、平安時代以降の軒丸瓦は 39 A、51 A、60 A、77 A が出土している。大安寺 60 A は、弁敷など紋様の比較から、大安寺 60 B に次ぐものと考え、平安後期 II に比定できる。60 A と 77 A は胎土・焼成・色調が同じで、指によるナデツケを多用するという造瓦技法が共通することから、同時期の製作と考える。さらに 60 A の大半が経蔵の出土であり、77 A も経蔵以外では出土しないことからみて、60 A・77 A は永祿による鐘楼・経蔵造立時所用瓦と考える。なお 60 A に関しては、同じく蓮華紋を主紋様とし、中房に凹文を配する河内系軒丸瓦に先行するとの評価もあり、60 A の範型の製作については、河内系軒丸瓦が出現する 11 世紀第 4 四半期以前に遡る可能性もある。大安寺 36 A については、1146 年から 1192 年の間に比定される法隆寺西院伽藍回廊修理瓦である法隆寺 36 C b と同範の可能性が高いことから、平安後期 II に比定した。大安寺 251 A については 1125 年から 1177 年の間に比定される興福寺 VII 平 A 11 と同範の可能性が高く、平安後期 II に比定した。大安寺 244 A は右半部片であるが、独特な唐草紋様から西大寺 288 A の左半部の可能性が考えられる。西大寺 288 A が保延 4 (1138) 年の四王堂造立時の生産とみられていることから、244 A を平安後期 II と比定した。大安寺 232 A・233 A・233 B は、1106 年から 1192 年の間に比定される法隆寺 348 A b に紋様が似ており、平安後期 II に推定する。大安寺 41 A・203 A については、杉山瓦窯の調査で、41 A・203 A が窯への輸送材として使用されず、大安寺より杉山瓦窯群灰原からの出土が顯著で、胎土・焼成・色調が酷似することから、12 世紀中頃以降の 4 号窯の製品である可能性が指摘されている。この考えに従い、41 A・203 A は平安後期 II とした。なお 203 A の成形技法

が 215 A と共通することから 215 A も平安後期 II に比定した。

鎌倉前期は治承 4 (1180) から建長 3 (1253) 年までである。中世軒瓦の年代は、造瓦技法から細分できることが明らかにされており、鎌倉・室町期の軒瓦は造瓦技法を中心に年代を比定した。ただし、分類できた巴紋軒丸瓦は、ほとんどが年代の細分に有効な丸瓦部が欠失している為、紀年銘が多く残る法隆寺の資料を参考に、紋様の差異に注意して編年した。

史料では元久元 (1204) 年に塔修理の勅進が行われているが、修造がどの程度進んだかは不明である。この時期は大安寺修造に関する史料が、この一つしか見出せず、比例するように比定できる軒瓦も少ない。法隆寺では巴頭部が尖り、巴頭同士接続する巴紋が 1192 年から 1261 年にかけての特徴とされている為、105 A は鎌倉前期に比定した。大安寺 202 A・244 A とともに頭貼り付け技法で、頭部・凸面平瓦部はタテケゼリのまま仕上げており、ともに鎌倉時代前期に比定できる。ただし、244 A には頭接合部側縁付近に凹型台の圧痕が無いことから、1180 年から 1210 年の間とみて、鎌倉前期前半に比定した。これに対し 202 A の方は頭接合部側縁付近に凹型台の圧痕が残り、同範の可能性が高い。西大寺例が 1210 年から 1260 年の間とされていることから、鎌倉前期後半に比定した。

鎌倉後期は宗性が大安寺別当に就任した建長 5 (1253) 年から元弘 3 (1333) 年までで、この時期、南都諸寺では軒平瓦に瓦当貼り付け技法が行われたものが出現する。史料では建長 5 (1253) 年東大寺僧宗性が大安寺別当になり、塔を修理する。西塔は既に保延 6 年 (1140) 磨石のみと記されているから、ここで修理されたのは東塔である。その後、宗性は 1260 年から 1263 年までの間は東大寺別当になっていたが、文永 3 (1266) 年再び大安寺別当になり、南大門を修理し、金堂の瓦葺き替えを行い、東西南面の大仏と塔四面の大仏を築いている。その後東塔は永仁 4 (1296) 年、笛火で焼失と記されており、修造後半世紀も経たず、灰燼に帰したことがわかる。発掘調査で、13 世紀頃に南大門礎石の据替え行われたことが確認されており、これは宗性の南大門修理を裏付ける。

宗性の修造時に製作された軒瓦には 173 A・274 A・174 A・274 B の二組を挙げることができる。軒丸瓦 173 A と軒平瓦 274 A は、両者とも「大安寺」と記す文字紋であり、意匠の共通性から 173 A・274 A が組み合うと考える。「大安寺塔」と記す文字紋軒丸瓦 174 A は、「大安寺寶塔」と記す文字紋軒平瓦 274 B との意匠の共通性から、174 A・274 B が組み合うと考える。軒平瓦

274 A・274 Bは頸裏面に補強用粘土を用いる瓦当貼り付け技法である。またその人半が頸部瓦当裏面にタテケズリを施しており、宗性の修造期の製作と考えて良い。瓦当紋様から、東塔修造および塔四面の大相新造には「大安寺塔」、「大安寺寶塔」と記された軒瓦 174 A・274 Bを、南大門修理や金堂の瓦葺き替え等、塔以外の堂舍修理には「大安寺」と記された軒瓦 173 A・274 Aを主体的に用いたと考える。なお、内区に「大安寺」と記し、外区に珠紋帯がある 175 A の造瓦技法については 173 A・174 A と同じであるため、これも鎌倉後期に比定した。大安寺に寺名を飾る軒瓦が出現した背景には、東大寺僧で、東大寺別当にも任じられた宗性の指揮のもと、東大寺の瓦工が大安寺塔修理瓦の製作に参加したとを考えられる。252 A については文永 8 年(1271)の東福寺法堂・祖堂・祠堂建設の際の所用瓦、東福寺 63 と同範の可能性が高いことから、鎌倉後期に比定した。205 A・205 B については頸裏面に補強用粘土を用いる瓦当貼り付け技法であること、連珠紋の盛行は 1300 年頃までと考えられていることから鎌倉後期に比定した。大安寺 246 A、250 C については、嘉暦 2(1327) 年の尾道淨上寺本堂再建瓦と同範で、大安寺 250 E も 250 C と同様に、唐草が連続する半截花紋という特徴から、246 A・250 C・E は鎌倉後期に比定した。大安寺 87 B・91 A・104 A・107 A・108 A・110 A・111 A については、巴紋が巴の頭部同士は接しないが互いに近接すること、巴頭部が尖り気味であること、巴紋はやや高く丸みをもつことが共通する。このような特徴をもつ巴紋軒丸瓦は、法隆寺では、1261 年から 1333 の間に比定されていることから、鎌倉後期とした。大安寺 107 B・107 C・108 B については巴の頭部同士が、互いに近接し、巴紋はやや高く丸みを持つ特徴はあるが、巴の頭部は円形に近くなっていることから、この特徴は法隆寺では室町前期の特徴になる、鎌倉後期から室町前期にかけてのものと推定した。

室町前期は、元弘 3(1333) 年から康暦 2(1380) 年までである。史料では康暦 4(1345) 年に、興福寺造営料の人和土打段米の所管を大安寺に移していることから、大安寺の修造が行われた可能性が指摘されている。この時に製作された軒平瓦は、紋様構成は唐草紋が完全に分離し、瓦当貼り付け技法であり、瓦当後縁に面取りのあるものとないものが共存する 250 A・B と指摘されている。250 B は平安時代以降の軒平瓦で最も出土点数が多い。そのことから、平安時代の 51 A を除き、平安時代以降の軒丸瓦で最も出土点数が多いものを探すと 88 A を挙げることができ、88 A・250 B の組み合せ

が考えられる。春日東塔南回廊・三面築地壇跡から、大安寺 88 A と大安寺 250 B a の両者と同範の可能性が高いものが出土しており、この考えを補強できる。250 A は、250 B の大型品とみられ、88 A と同様の紋様構成で大型品である 88 B と組み合うと考える。88 A・88 B とともに造瓦技法・胎土も同じである。巴の頭部同士近いこと、巴の頭は円形に近いこと、巴紋の断面が半球状である特徴は法隆寺では 1333 年から 1361 年の間の特徴と指摘されており、88 B・250 A と 88 A・250 B の大小 2 組で使用されたと考える。なお、他に 250 A・B と同時期の瓦には、241 A が指摘されており、248 A も紋様構成の共通性から、250 A・B と同じ室町前期に比定した。大安寺 254 A は同範の可能性が高い西大寺 350 A が 1333 から 1380 年の間に比定されていること、大安寺 222 A は同範の可能性が高い法隆寺 230 A が康安元(1361) 年の地震後の補修用と考えられていることから、それぞれ室町前期に比定した。

室町中期は康暦 2(1380) 年から永亨 2(1430) 年まで、室町後期 I は永亨 2(1430) から延徳 2(1490) まで、室町後期 II は、軒平瓦が頸貼り付け技法となる延徳 2(1490) から慶長 8(1603) 年までとした。室町中期から室町後期 II の時期の史料は、元中 2(1385) 年の火災、永亨 8(1436) 年、長錆 3(1459) 年、明応 3(1494) 年、天正 13(1585) 年、慶長元(1596) 年の震災と、被災記事が多く、造営関連の記録は天正 18(1590) 年の金堂修理のみである。史料に比例して、室町中期から室町後期 II の時期の軒瓦は少なく、大規模な修理は無かったと考えられる。

大安寺 254 B は造瓦技法・紋様構成が、254 A とほぼ同じであるが、瓦当下縁に面取りを施すことが異なる。瓦当下縁に面取りを施す軒平瓦は 1390 年以降と指摘されており、室町中期に比定した。

大安寺 246 B・247 A は瓦当貼り付け技法であるが、瓦当外縁をナデで調整していることから、室町後期 I に比定した。さらに、247 A については、応仁 2(1468) 年から文明 6(1474) 年にかけての元興寺本堂修理に際して使用されたと考えられている元興寺 32 と同範の可能性が高く、室町後期 I 末頃に比定した。

大安寺 250 F は、天文 4(1535) 年の銘がある法隆寺 272 J と同範であることから、室町後期 II とした。

江戸前期は慶長 8(1603) 年から宝永元(1704) 年、江戸中期は宝永元(1704) 年から享和 2(1802) 年までとした。史料には寛文元(1661) 年に、大安寺は「二間四面の舎」残るのみと記され、室町後期 II までの被災

大安寺旧境内から出土した平安時代以降の軒瓦

平安前期 (784~911)			室町前期 (1333~1380)		
				222A・241A・248A・254A	
平安中期 (911~1017)			室町中期 (1380~1430)		
平安後期I (1017~1100)			室町後期I (1430~1490)		
平安後期II (1100~1180)			室町後期II (1490~1603)		
鎌倉前期 (1180~1253)			江戸前期 (1603~1704)		
鎌倉後期 (1253~1333)			江戸中期 (1704~1802)		
			江戸後期以降 (1802~)		
	87B・91A・104A・107A・108A・110A・111A・175A 205A・205B・246A・250C・250F・252A	173A-274A			

図9 大安寺旧境内出土平安3朝代以降の軒瓦年譜略図(軒瓦の折本 1/8)

で、多くの建物が失われていたと察せられる。そして江戸時代ではこれ以降、修理・再興が成了たという記事が無い。史料に比例し、江戸前期に比定できる軒瓦も無い。

江戸中期の瓦には 87 A・91 B・253 A・258 A・259 A を挙げることができる。87 A・91 B は瓦当面に確認できるキラコが、法隆寺では 18 世紀後半から確認できること、外縁幅が後に述べる江戸後期としたものより、狭いことから江戸中期後半に比定した。253 A・258 A・259 A は、唐草が連続しており、特に 253 A は 1603 年から 1650 年に比定される法隆寺 280 B に紋様構成が似る。しかし 253 A・258 A・259 A の瓦当面にはキラコが確認できることから、江戸中期後半に比定した。史料との比較から江戸中期後半以降の軒瓦は、その大半が大安寺の所用瓦ではなく、境内が町屋と化した後、蔵などに使用されたものと考える。言い換えれば、大安寺の町屋では江戸中期後半以降に屋根瓦が使用され始めたとも言えよう。

江戸後期以降は享和 2 (1802) 年以降である。江戸後期を代表するのは橋紋で、大安寺出土橋紋軒瓦平瓦には 260 A～J、261 A～D、262 A～C がある。法隆寺では、花弁と上部第 1 単位の唐草の間隔が広い橋紋は天保年間 (1830～1844) 以前とされ、花弁と上部第 1 単位の唐草の間隔がほとんど無い橋紋は天保年間以降と考えられている。以上のことから 260 E・F・G は天保年間以前、260 A・B・C・D・H・I・J、261 A・B・C・D、262 A・B・C は天保年間以降に比定できる。これら橋紋軒瓦の外縁端部は面取りを施していることから、同時期の軒丸瓦の外縁端部にも面取りを施すものと考えることができる。外縁端部に面取りを施す凹紋軒丸瓦は、88 D・91 C・91 D・91 F・111 C がある。これらは全て、巴がオタマジャクシ形であり、瓦当面にキラコが確認できることも共通する。これらの特徴を法隆寺例と比較しても江戸後期以降に比定してよいと考える。

IV おわりに

本稿では大安寺から出土した平安時代以降の軒瓦を分類、編年してみた。今回の作業を思い立ったのは、大安寺杉山瓦窯の操業年代が奈良時代なのであろうかと疑問を持ったことに始まる¹⁰¹。杉山瓦窯では製品といえる丸・平瓦は出土しているが、軒瓦は出土していない。そこで製品である丸・平瓦の年代的特徴を抽出するうえで、まず大安寺出土平安以降の軒瓦を編年し、その丸瓦部・平瓦部の特徴を抽出し、それを杉山瓦窯の丸・平瓦と対比させてみたいと考えたのである。この検討については

稿を改めて述べてみたい。

本稿の執筆にあたっては今井晃樹氏、中井公氏、宮崎正裕氏、山前智敬氏に御教示・御協力を頂いた。文末ではあります、記して感謝致します。

- 1) 山本忠尚「大安寺の瓦」『大安寺史・史料』大安寺 1984
- 2) 軒瓦にすべて数字とアルファベットからなる型番号を設定した。大文字のアルファベットは範型の違いを示す。型番号は大安寺における通し番号として設定しているが、空きを設けているため連續しない。なお記述に際しては、たとえば 12 型式 A 様であれば、12 A というように、型式や種を省略することもある。また本稿で使用した拓本のうち、大安寺出土瓦が映りである場合、破損部分を複数枚の破片で復元したもののがある。さらには 15・254 A の拓本では、破損部分を大安寺出品品以外の器皿品で復元しており、その部分は墨を塗して表示した。34 A・216 A に関しては、拓本と実物両方が、それぞれ別の資料であるが、両者で大安寺出土品である。
- 3) 中島義典「平城京左京三条六坊丁五坪・奈良町遺跡の調査 第 482 次」「奈良市埋蔵文化財発掘調査報告書 平成 14 年度」奈良市埋蔵文化財委員会 (以下、奈良市埋蔵委) 2006
- 4) 武内五百利「平安時代における興福寺の近旁と瓦」『仏教藝術』194 号 毎日新聞社 1991 なお、以下の本文の中で興福寺例と同様もしくは同様の可能性の高いものを挙げているにもかかわらず、本文注を入れていない場合、出典はこれと同じである。
- 5) 小泽洋「第 3 享和造物 3 瓦堀」『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』西大寺 1990 なお、以下の本文の中で西大寺例と同様もしくは同様の可能性の高いものを挙げているにもかかわらず、本文注を入れていない場合、出典はこれと同じである。
- 6) 佐川正敏ほか「法隆寺の宝室 瓦」法隆寺昭和実賛財團 15 1992 なお、以下の本文の中で法隆寺例と同様もしくは同様の可能性の高いものを挙げているにもかかわらず、本文注を入れていない場合、出典はこれと同じである。
- 7) 注 1 の文献と同じ。
- 8) 山崎信一「第 V 享和造物 2 瓦堀」『東福寺発掘調査報告書』奈良国文化財研究所 (以下、奈良文研) 1987 なお、以下の本文の中で東福寺例と同様もしくは同様の可能性の高いものを挙げているにもかかわらず、本文注を入れていない場合、出典はこれと同じである。
- 9) 注 8 の文献の Fig. 40-2。
- 10) 山崎信一「人相における平安時代の互生庵」『研究論集』VI 奈文研 1980
- 11) 長谷川弘他「軒丸瓦・軒平瓦型式一覧表」『史跡及び名勝等平野庭園保存監査報告書』(原) 平野園 2003 なお、以下の本文の中で平等院例と同様もしくは同様の可能性の高いものを挙げているにもかかわらず、本文注を入れていない場合、出典はこれと同じである。
- 12) 国宝唐招提寺空堂修業事務所「国宝唐招提寺空堂修業工事報告書」1941 Fig. 12
- 13) 奈良県教育委員会 (以下、奈良県教委) 文化財保存課「唐招提寺空堂および御經院工事報告書」1962
- 14) 宮崎正裕「奈良Ⅳ章出土遺物 第 2 節瓦・埴輪」『史跡大安寺旧境内一杉山古墳群区の発掘調査・整備事業報告』奈良市教委 1997
- 15) 川辻俊夫「平城京の遺物 2 瓦堀」『平城宮発掘調査報告書 VI』奈文研 1975
- 16) 宮崎正裕「平城京左京三条六坊十四坪・奈良町遺跡の調査 第 121 次 出土遺物 瓦」『奈良市埋蔵文化財発掘調査要報書 平成 11 年度』奈良市教委 2001
- 17) 飛鳥資料館「飛鳥時代の埋蔵文化財に関する考察」1992 P.20-70
- 18) 名古屋市博物館「名古屋市埋蔵文化財資料収蔵目録 7」名古屋市博物館収蔵大和・吉瓦岡彌縫鏡 2006 No.01115
- 19) 以下、巴紋の巻き方について、頭部から尾部へ向っての方向とし、時計回りの方向へ尾部が纏れるものを「右巻き」、逆時計回りの方向へ尾部が纏れるものを「左巻き」とした。
- 20) 2000 年、國厚考古奈良研究会の岡林才介氏、奈文研の千田剛道氏とともに実物調査により確認した。
- 21) 「渡良瀬「古宇津講座 5」達山園 1928 図 597
- 22) 稲垣哲也ほか「春日西塔・東塔跡の発掘 犬下の御塔・院の御塔」奈良國立博物館 1982
- 23) 石田茂作編「古瓦図鑑」1930 PL.89

大安寺跡境内から出土した平安時代以降の瓦

- 20) 注 6 の文献の瓦真園版 111。なお、同書では瓦塚寺 74 A は大安寺側と同階で、元弘 2 年（1332）の大安寺塔頭瓦塚門の所用瓦と述べられている。しかし大安寺 174 A と組み合う新瓦平瓦 28 B は瓦当貼り付け技法であることから、1204 年の製作とするには古すぎると考える。
- 25) 関谷貞「瓦」『考古学講座 5』雄山社 1928 図 675
- 26) 井伊芳太郎「奈良時代寺院志」1933 国版 61・草瓦 5 および石川茂作「飛鳥時代寺院址の研究」1936 国版第 173-25
- 27) 石川茂作「飛鳥時代寺院址の研究」1936 国版第 103-102、国版 104-102
- 28) 江 27 の文献の国版第 156-24
- 29) 瓦当貼り付け技法の定義は山崎信二「中世瓦の研究」奈文研 2000 に記載。なお、丹波道一「元興寺文化財申込手帳解説」平成 14 年度「元興寺文化財研究」No.70（財）元興寺文化財研究所 1999 にいう「紋様面・頭付貼り付け法」のことである。
- 30) 注 18 の文献の No.07313.
- 31) 興福寺で採集されていることは、山前吉敬氏の調教師による。
- 32) 奈文研「興福寺食堂発掘調査報告」1959 P.L.39-8
- 33) 鶴巣敏人・大久保ら「法隆寺の古瓦」『佛敎藝術』68 号 1968
- 34) 山崎信二「第 VI 時空考 寺 2 遺物」『奈良寺発掘調査報告』余文研 1987
- 35) 木村捷三郎ほか「仁和寺守内堀内発掘調査報告書」御室会社起建設に伴う調査一』(財)京都府埋蔵文化財研究所(以下京都府市埋文研)の 127a・127 b および鶴巣也注は「木村捷三郎復元瓦録」京都府市埋文研 1996 国版 50-827
- 36) 井之内謙「樹脂瓦セメント瓦予定地の調査 III 遺物 3 瓦」『奈良女子大学構内防災発掘調査概要』奈良女子大学 1989 第 6 頁-4
- 37) 原田二郎・鳥井耕「興福寺の瓦軒にについて」『奈良市埋蔵文化財調査センター報告』1996 余文研 1997 なお、以下の本文中に横井房寺例と同様もしくは同様の可能性の高いものを持てているにもかかわらず、本文注を入れていない場合、出典はこれと認定である。
- 38) 関谷貞「第 3 事連造 第 3 第五鋪 「則の瓦」『東大寺防災施設工事・発掘調査報告』余文研 2000
- 39) 制井伸也ほか「木村捷三郎収集瓦同録」京都府市埋文研 1996 国版 26-310
- 40) 山崎信二「6 出土遺物 (1) 瓦」『興福寺 第 1 時期境内施設事業とともに なう発掘調査報告』1999 第 23 図 -29
- 41) 奈良教委・財團法人建築研究会編「唐招提寺防災工事・発掘調査報告」1995
- 42) 山崎信二「20 黒御守宝篋院の調査 第 223-3 次 B、瓦塚頭」『1991 年度平城宮跡発掘調査報告』1992
- 43) 注 14 の文献と同じ。
- 44) 附田尚尚代ほか「宮町跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要報告』昭和 56-57 年度。八尾市教育委員会 1982 図 11-25
- 45) 注 18 の文献の No.51301.
- 46) 奈良市住在の近藤康行氏が右半部の破片を 7 点採集・所蔵していた。
- 47) 山崎信二「中世瓦の研究」余文研 2000 なお、尼道淨土寺例が大安寺 246 A と比べて、紋様がシャープであることから、大安寺 246 A の方が後出であることが確認されている。
- 48) 芦田淳「元興寺極楽浄土堂軒瓦等にみる瓦葺合接技法の開闢」『元興寺文化財研究』No.67 財団法人元興寺文化財研究所 1998
- 49) 御原豊一ほか「元興寺境内の調査 第 7 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告』昭和 61 年度。奈良市教委 1987
- 50) なお、山崎信二「中世瓦の研究」奈文研 2000 では大安寺出土品を A 種(第 44 回 10)、B 種(第 44 回 2)に分類するが、A 種、B 種とも同階で大安寺 250 A である。
- 51) 木川敏希等「『古跡』遺跡発掘調査概要」八尾市教育委員会 1982 図 9-26-31
- 52) 山崎信二「中世瓦の研究」奈文研 2000
- 53) 注 22 の文献と同じ。
- 54) 古河貞「大坂方八尾市内出土屋瓦について」『古代研究』16 分、財団法人元興寺文化財研究所 1980 および原出修他「高安の遺跡と遺物」『大阪文化誌』第 6 号、1977
- 55) 注 52 の文献で、尼道淨土寺段階の危険を、改修したものが大安寺 250 C であると明らかにされている。
- 56) 東福寺「東福寺防災施設工事・発掘調査報告書」1990
- 57) 今里義次「黒御守宝篋院八幡神社の出土遺物」『膳所古瓦の研究』真隠社 1995 図 6-3
- 58) 注 52 の文献と同じ。
- 59) 野島徳「第 3 回 第 2 次調査」『上滑道路発掘調査報告書』四条畠市教育委員会 2006 図 16 および辰永信雄「生駒山西面の山岳寺
- (大阪府)「仏教藝術」265 号 4
- 60) 2009 年、奈文研の今井昇南氏のご好意により、西大寺 350 A と实物調査を行い、大安寺 254 A と同階であることが判明した。
- 61) 注 27 の文献の国版第 190-14-14'
- 62) 原田二郎「正暦寺旧境内の調査第 1・2 次 瓦塚頭」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成 10 年度。奈良市教委 2001
- 63) 注 8 の文献の F 1 a, 40
- 64) 注 39 の文献の国版 33-458
- 65) 注 39 の文献の国版 35-509
- 66) 齋藤公（859）年に大安寺が建立されているが、櫛皮葺きとある。
- 67) 中井公他「2、史跡大安寺境内（第 25 ~ 28）の調査」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』昭和 61 年度。奈良市教委 1987
- 68) 中井公「瓦からみた大安寺西斯の建遷をめぐって」『考古学研究一小葉原先生誕辰記念集』、2007
- 69) 以下、出土資料の年代記は注 6 の文献に掲載。
- 70) 注 1 の文献と同じ。
- 71) 法隆五輪廟「史跡大安寺旧境内（西塔跡）の調査 第 100 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成 14 年度。奈良市教委 2006
- 72) 注 17 の文献の国版 20-70-71
- 73) 注 37 の文献と同じ。
- 74) 宮崎正詮「第 VI 時空考 第 4 節杉山瓦窯出土の瓦」『史跡大安寺境内一杉山瓦窯地区の発掘調査・発掘事業報告』奈良市教委 1997
- 75) 注 8 の文献で、よく似たのが奥院と報告されている。
- 76) 以下、蓮池窯の年代記は注 34 の文献に掲載。
- 77) 注 5 の文献で大安寺 242 B が瓦面 246・西大寺 270 A より危険が進行していることを明らかにされている
- 78) 注 10 の文献と同じ。
- 79) 注 34 の文献と同じ。
- 80) 津々池窯「平安時代後期の瓦一円文瓦の様相について」『研究記要 第 3 号』京都府市埋文研 1996
- 81) 蘭林本「奈良市内 2 世紀以前の瓦の標榜 B 興福寺瓦再建時の瓦」『長谷寺』奈良県立原歴考古研究所 1999
- 82) 以下、平安時代の興福寺資料の年代記は注 4 の文献に掲載。
- 83) 注 74 の文献と同じ。
- 84) 注 20 の文献と同じ。
- 85) 注 8 の文献と同じ。
- 86) 京出庭二郎「史跡大安寺境内の調査 (4) 経縫の調査 第 81 次 瓦塚頭」『奈良市埋蔵文化財発掘調査概要報告書』平成 10 年度。奈良市教委 1999
- 87) 注 81 の文献と同じ。
- 88) 注 5 の文献と同じ。
- 89) 注 74 の文献と同じ。
- 90) 注 52 の文献と同じ。
- 91) 「法隆寺御守八幡講碑」石背文書には、先度寺務（寧性 1 度目の大安寺別当、1253 年～）のとき塔を修理し、今度寺務（寧性 2 度目の大安寺別当、1266 年～）のとき、南大門修理、金堂瓦葺き替え、東西南北大門と塔四面の入母屋の新築がある。
- 92) 黑田尚義は「大安寺の古瓦」『天理時報』1943 で、「和漢共欣慶」に永仁 4 年、雪矢火で大安寺東廈が焼失したことと記されていると述べる。
- 93) 京出庭二郎「史跡大安寺境内の調査 第 38 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成元年度。奈良市教委 1989
- 94) 注 52 の文献と同じ。
- 95) 久田博太郎「南都七寺の歴史と年表」1979 96-98) 注 52 の文献と同じ。
- 100) 注 48 の文献と同じ。
- 101) 大安寺杉山瓦窯の棗葉年代を奈良時代からとする考えに対する疑問は以前記したものがある。(原田二郎「記号！」) が評論された「大安寺」、瓦瓦「瓦瓦千年 森都大先生誕辰記念論文集」1999) その後、中井公氏も杉山瓦窯棗葉年代を平安時代以降とする考え方を述べている。(中井公「大安寺杉山瓦窯の評論をめぐって」『考古学に学ぶ』2003)

軒瓦計測値表(蓋取数)

型式	直径	内区				外区				出土点数
		中房径	中房紋様	弁区種	弁数	幅	紋様	幅	高	
12 A			一		T	14	—	13	12	1
13 A		蓮子1+8		T 10	15	S	—	—	—	2
15 A	176	36	蓮子1+6	94	T 12	20	S 24	21	7	1
18 B	93	10	蓮子1	66	T 16	3	—	10	7	1
34 A	143	48	蓮子1+8	85	H S 4	12	S 24	17	6	
34 B					H S	4	—	11	7	1
36 A					F	—	—	18	7	1
39 A	186	58	蓮子1+6	122	F 8	13	S	19	8	3
41 A	163	45	蓮子4+8	99	F 6	13	S 24	19	12	7
45 A			蓮子		F	13	S	16	6	1
46 A		67	蓮子		F	14	S	—	—	14
51 A a	162	42	蓮子1+5	100	F 8	13	S 16	18	8	7
51 A b	163	42	蓮子1+5	109	T 8	13	S 16	14	8	38
51 A c	156	42	蓮子1+5	104	T 8	13	S 16	13	4	9
51 A d	170	44	蓮子1+5	104	T 8	14	S 16	19	6	3
55 A	139	50	—	103	F 8	3	—	15	9	2
60 A	172	73	右巻き二四	124	F 6	10	S	14	8	10
60 B	144	49	右巻き二四	104	F 8	8	S ± x	12	4	

軒丸計測値表(巴段)

型式	直径	内区				外区				出土点数
		紋様 (巴)	径	幅	紋様	界幅	幅	高		
77 A	175	左二	114	8	S	内のみ	19~26	7	3	
87 A	132	左三	66	18	S 16	内のみ	15	5	1	
87 B	124	左二	74	11	S	内のみ	14	11	1	
88 A	143	左三	83	14	S 24	内のみ	13~19	10	16	
88 B		左二		16	S	内のみ	22	12	3	
88 D		左三	55	17	S	内のみ	20	7	1	
91 A		左三		16	S	—	16	7	2	
91 B		左二	66	24	S	—	15	5	1	
91 C	134	左三	58	18	S	—	20	7	2	
91 D	133	左二	53	17	S 16	—	23	8	2	
91 E		左三		16	S	—	26	10	1	
91 F	137	左二	61	14	S 16	—	24	8	1	
101 A		右三		15	S	内外	27	17	1	
105 A		右三		11	S	内のみ	14	10	2	
107 A		右三	84	11	S	内のみ	15	1		
107 B		右三	95	10	S	内のみ	17	10	2	
107 C		右二	90	13	S	内のみ	20	11	2	
108 A		右三	97	23	S	内のみ	18	18	5	
108 B		右二		16	S	内のみ	20	15	6	
110 A		右三		15	S	外のみ	21	12	1	
111 A	168	右三	102	11	S	—	22	11	7	
111 C	147	右三	63	18	S 18	—	24	8	1	

軒丸計測値表(文字数)

型式	直径	内区				外区				出土点数
		紋様(文字)	径	幅	紋様	幅	高			
170 A	136	梵字「アーチ」	112	—	—	12	—	7	—	
173 A	182	「大安寺」	118	16	K	16	—	17	—	29
174 A		「人安寺塔」		16	K	19	—	15	—	12
175 A		「大安寺」		17	S	19	—	14	—	3

軒半瓦計測値表

型式	最大幅	厚さ	内区				上外区		下外区		脇区		外区高	脇の形態	出土点数
			厚さ	紋様	厚さ	紋様	厚さ	紋様	厚さ	紋様	幅	高			
202 A		20	K I	6	K	8	K	7	K	11	段	—	—	2	
203 A			SとKT	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
205 A		52	20	S	5	—	5	—	—	—	10	段	—	5	

大安寺旧境内から出土した平安時代以降の軒瓦

型式	最大幅	厚さ	内区		上外区		下外区		脇区		外区高	頭の形態	出土点数
			紋様	厚さ	紋様	厚さ	紋様	幅	紋様	幅			
205 B	40	17	S	3	-	3	-	3	-	9	段	1	
215 A	53	23	Sと唐草紋	5	-	3	-	3	-	5	直	1	
220 A a	-	27	HK	10	S	10	S	10	S	3	直	6	
220 A b	38	24	HK	10	-	-	-	-	-	5	直	-	
222 A	50	13	唐草紋	4	-	3	-	11	-	16	段	3	
229 A	55	21	唐草紋	6	Sと唐草紋	12	LV	6	LV	4	直	2	
231 A	-	31	KK	-	S	15	S	-	-	3	段	2	
232 B	267	65	KK	11	S	10	S	15	S	4	直	1	
232 A	-	25	KK	3	-	-	-	5	-	6	直	1	
233 A	43	22	KK	4	-	3	-	4	-	4	曲	2	
233 B	-	17	KK	-	2	-	3	-	6	直	1		
235 A a	54	31	KK	12	-	11	-	18	-	2	-	-	
235 A b	48	28	KK	-	-	-	-	-	-	4	直	1	
236 A	49	30	KK	8	S	8	S	9	S	4	直	2	
238 A	-	25	KK	4	-	-	-	-	-	2	曲	1	
240 A	-	29	KK	5	-	4	-	5	-	5	直	15	
241 A a	45	19	KK	3	-	2	-	3	-	6	段	5	
241 A b	-	19	KK	3	-	2	-	-	-	6	段	2	
242 A	272	49	34	KK	-	-	16	LV	-	-	2	-	-
242 B	260	47	17	KK	21	S 17	9	LV 16	-	-	3	直	1
244 A	-	34	20	KK	-	-	-	-	-	6	曲	1	
246 A	-	33	KK	4	-	3	-	-	-	10	段	4	
246 B	-	24	KK	4	-	-	-	4	-	10	段	1	
247 A	-	59	33	KK	3	-	3	-	3	-	6	段	11
248 A	257	59	30	KK	4	-	4	-	3	-	7	段	6
250 A	285	60	33	KK	4	-	4	-	4	-	10	段	10
250 B a	246	58	29	KK	4	-	4	-	5	-	8	段	48
250 B b	-	28	KK	4	-	4	-	5	-	8	段	1	
250 C	-	66	20	KK	3	-	3	-	3	-	7	段	7
250 E	-	35	18	KK	-	-	-	-	-	-	5	段	2
250 F	-	19	KK	-	-	-	-	-	-	-	4	段	1
251 A	-	36	KK	-	-	-	-	-	-	-	8	段	4
252 A	-	54	17	KK	4	-	5	-	5	-	8	段	1
253 A	-	33	22	KK	-	-	-	-	-	-	4	段	1
254 A	-	69	31	KK	5	-	5	-	5	-	8	段	6
254 B	277	54	23	KK	4	-	4	-	4	-	6	段	1
258 A a	-	38	18	KK	-	-	-	-	-	-	5	段	1
258 A b	215	41	19	KK	-	-	-	-	-	-	6	段	1
259 A	-	36	21	KK	-	-	-	-	-	-	2	段	1
260 A	253	39	24	KK	-	-	-	-	-	-	5	段	2
260 B	-	-	KK	-	-	-	-	-	-	-	6	段	1
260 C	-	44	23	KK	-	-	-	-	-	-	5	段	1
260 D	-	43	27	KK	-	-	-	-	-	-	3	段	1
260 E	224	43	20	KK	-	-	-	-	-	-	3	段	3
260 F	-	-	KK	-	-	-	-	-	-	-	4	段	1
260 G	-	38	23	KK	-	-	-	-	-	-	3	段	1
260 H	-	41	22	KK	-	-	-	-	-	-	6	段	1
260 I	-	42	23	KK	-	-	-	-	-	-	5	段	1
260 J	-	45	24	KK	-	-	-	-	-	-	8	段	1
261 A	229	-	24	KK	-	-	-	-	-	-	4	段	1
261 B	-	40	25	KK	-	-	-	-	-	-	5	段	1
261 C	-	29	24	KK	-	-	-	-	-	-	5	段	1
261 D	-	39	21	KK	-	-	-	-	-	-	5	段	1
262 A	-	21	KK	-	-	-	-	-	-	-	6	段	1
262 B	-	26	KK	-	-	-	-	-	-	-	5	段	2
262 C	-	40	23	KK	-	-	-	-	-	-	5	段	2
270 A	-	32	MJ 梵字「キヤ・カ・ラ・バ・ア」	-	-	-	-	-	-	4	直	1	
274 A	289	77	34	MJ 「大安寺」	5	-	3	-	4	-	13	段	10
274 B	-	77	31	MJ 「大安寺 寶塔」	5	-	3	-	5	-	10	段	17

<片側>

1.略記号の意味は以下の通り。T: 単弁葉巻紋、HS: 宝相花紋、F: 複弁葉巻紋、S: 斜紋、K: 圓線、界線、KK: 均整唐草紋、HK: 鎧唐草紋、KI: 異何学紋、KT: 龜頭紋、M: 文字紋、LV: 縦線直巻。

2.人安寺出土品が図版で、他の複数で良好的同様資料がある場合は、應了数・弁数・株・文数・羅線巻紋数に記して同様資料での数を記したものがある。

3.出土点数に関しては、平成12年度までの奈良市による人安寺旧境内の調査で出土した分のみカウントした。

4.表に掲げた原式・種が特定できる資料の他、縦式・横式・種が不明の軒丸瓦が126点、軒平瓦が59点ある。

印刷・製本仕様データ

表 紙：アートボストカード220kg/m²・マットpp加工
見返し：白色上質紙110kg/m²
巻頭図版：特アート紙135kg/m²
本文：白色マットコート紙90kg/m²
本文フォント：ヒラギノ明朝体
製本：左開き・糸かぎり綴じ

©2009 by the Nara Municipal Board of Education

No part of this publication may be copied or reproduced in any form without written permission from the copyright owner. Printed in Japan.

奈良市埋蔵文化財調査年報

平成18(2006)年度

ISSN 1882-9775

印 刷 平成21(2009)年3月16日

発 行 平成21(2009)年3月27日

編 集 奈良市埋蔵文化財調査センター
630-8135 奈良市大安寺西二丁目281番地
TEL 0742-33-1821
FAX 0742-33-1822
URL <http://www.city.nara.nara.jp/>
E-mail maizoubunka@city.nara.lg.jp

発 行 奈良市教育委員会
630-8580 奈良市二条大路南一丁目1-1
TEL 0742-34-1111(代)

印 刷 株式会社 明新社
630-8141 奈良市南京終町三丁目464番地

ISSN 1882-9775

**ANNUAL RESEARCH REPORT
OF
ARCHAEOLOGY IN NARA CITY AREA
2006**

CONTENTS

- I PRELIMINARY REPORTS OF ARCHAEOLOGICAL EXCAVATIONS IN NARA CITY AREA IN 2006.
- II REPORTS OF ARCHAEOLOGICAL SCIENCE.
- III REPORTS OF CONSERVATION AND MANAGEMENT FOR ARCHAEOLOGICAL SITES AND MATERIALS IN 2006.
- IV BULLETIN OF THE ARCHAEOLOGICAL RESEARCH CENTER OF NARA CITY.

**NARA MUNICIPAL BOARD OF EDUCATION,
2009**

**ANNUAL RESEARCH REPORT
OF
ARCHEOLOGY IN NARA CITY AREA
2006**

NARA MUNICIPAL BOARD OF EDUCATION , 2009